

# 長内遺跡

—町道改良事業に伴う平成 29 年度発掘調査報告書—

2019 年 7 月

丸森町教育委員会

# 長内遺跡

—町道改良事業に伴う平成 29 年度発掘調査報告書—

## 序 文

丸森町では、これまでに縄文時代から近世にかけての 164 を数える遺跡が発見されており、丸森の地は古くから豊かな自然に囲まれ、人々の生活に適した土地であったことがわかります。

本書で紹介する長内遺跡の発掘調査は、丸森町町道改良工事に伴って実施したもので、平成 29 年 4 月 24 日に行った確認調査の結果、堅穴建物跡と思われる遺構が確認され、遺跡の詳細を記録することが必要となり、平成 29 年 8 月 3 日から 10 月 20 日にかけて行いました。

調査の結果、古墳時代前期と古代の堅穴建物跡が確認され、それぞれの時代に集落が営まれていたことがわかりました。特に古墳時代前期の堅穴建物跡では火災に遭った痕跡が確認され、当時の人々が使用した土師器などの生活用具が数多く残されていました。

古墳時代以降、丸森町では遺跡数が増加し、多くの人々がこの地で生活を営んでいたことが想像されます。その生活を伺い知る手がかりは台町遺跡・矢ノ目遺跡で住居跡等が発見されていたのみであり、今回の調査成果は、町の歴史を知る大変貴重な発見となりました。

発掘調査ならびに本調査報告書の刊行にあたりましては、地元の方々・関係機関の方々より多大なるご協力をいただきました。ご協力をいただきました皆様に対し心から感謝を申し上げます。

平成 31 年 月

丸森町教育委員会

教育長 佐藤 純子

## 例　　言

1. 本書は丸森町建設課が行う町道改良工事に伴い、平成 29 年度に実施した長内遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は丸森町教育委員会が主体となり、丸森町教育委員会生涯学習課が担当し、宮城県教育庁文化財課（平成 30 年 4 月 1 日より文化財保護課から課名変更）の協力を受けた。
3. 発掘調査及び整理・報告書作成に当たっては、以下の方々及び機関からご指導・ご協力をいただいた。（順不同・敬称略）  
宮城県教育庁文化財課、青山博樹（福島県文化振興財団）、辻 秀人（東北学院大学）
4. 本書に掲載した遺跡分布図は、国土地理院発行「丸森」・「角田」（縮尺 1/25000）の地形図を複製して使用した。
5. 使用した座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第 X 系による。図中の北は第 X 系座標の北と一致する。
6. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。  
SI: 壓穴建物跡 SX: 壓穴状遺構・性格不明遺構
7. 遺構平面図・断面図にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として以下のとおりである。  
遺構配置図 : 1/200 遺構平面図・断面図 : 1/60
8. 土色の記述には、小山・竹原編（2002）「新版標準土色帖」を使用した。
9. 遺物図版にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として以下のとおりである。  
土器 : 1/3
10. 執筆は丸森町教育委員会と宮城県教育庁文化財課で協議し、第 1 章から第 3 章は荒井優作、第 4 章・第 5 章は佐藤則之と梅川隆寛、第 6 章は梅川が担当した。
11. 発掘調査の出土遺物・図面・写真は丸森町教育委員会が管理・保管している。

## 調査要項

遺跡名	長内遺跡（遺跡番号 10085）
所在地	宮城県伊具郡丸森町館矢間館山字長内
調査原因	町道長内 2 号線道路改良事業
調査主体	丸森町教育委員会
調査協力	宮城県教育庁文化財課
調査担当	丸森町教育委員会生涯学習課 荒井優作
調査員	宮城県教育庁文化財課 佐藤則之 豊村幸宏 斎藤和機 梅川隆寛
調査補助員	〔発掘調査〕 天野剛弘 大槻重行 斎藤健治 天野幸枝 斎藤芳夫 〔整理作業〕 天野剛弘 大槻重行 天野幸枝 斎藤芳夫
調査期間	〔発掘調査〕 確認調査：平成 29 年 4 月 24 日 本 調査：平成 29 年 8 月 3 日～平成 29 年 10 月 20 日 〔整理作業〕 平成 29 年 10 月 23 日～平成 31 年 3 月 26 日
調査面積	約 247 m <sup>2</sup> （調査対象面積約 1,500 m <sup>2</sup> ）

## 目次

序 文	丸森町教育委員会教育長 佐藤純子
例 言	
目 次	
第 1 章 調査に至る経緯	1
第 2 章 遺跡の概要	3
第 1 節 遺跡の位置と地理的環境	3
第 2 節 歴史的環境	3
第 3 章 調査の方法と経過	4
第 4 章 基本層序	5
第 5 章 検出遺構と出土遺物	6
第 1 節 古墳時代	6
A. 竪穴建物跡	6
B. 竪穴状遺構	27
第 2 節 古代	27
A. 竪穴建物跡	27
B. 竪穴状遺構	27
第 3 節 その他の遺構遺物	30
A. 性格不明遺構	30
第 6 章 総括	32
第 1 節 古墳時代	32
第 2 節 その他の遺構と遺物	48
第 3 節 まとめ	50
参考文献	
写真図版	
報告書抄録	

## 図目次

第1回	丸森町の位置	1
第2回	遺跡の位置	1
第3回	長内遺跡と周辺の遺跡	2
第4回	調査区配図	4
第5回	基本手順	5
第6回	遺構配置図	7
第7回	S101堅穴建物跡	8
第8回	S101堅穴建物跡 遺物出土状況	9
第9回	S101堅穴建物跡 出土遺物(1)	10
第10回	S101堅穴建物跡 出土遺物(2)	11
第11回	S101堅穴建物跡 出土遺物(3)	12
第12回	S101堅穴建物跡 出土遺物(4)	13
第13回	S101堅穴建物跡 出土遺物(5)	14
第14回	S104堅穴建物跡	17
第15回	S104堅穴建物跡 遺物出土状況	18
第16回	S104堅穴建物跡 出土遺物(1)	18
第17回	S104堅穴建物跡 出土遺物(2)	19
第18回	S106堅穴建物跡	21
第19回	S106堅穴建物跡 出土遺物	22
第20回	S107堅穴建物跡 遺物出土状況	23
第21回	S107堅穴建物跡 遺物出土状況	24
第22回	S107堅穴建物跡 出土遺物(1)	25
第23回	S107堅穴建物跡 出土遺物(2)	26
第24回	S103堅穴建物跡	28
第25回	S103堅穴建物跡 出土遺物	28
第26回	SX05堅穴状遺構	29
第27回	SX05堅穴状遺構 出土遺物	29
第28回	SX02性格不明遺構	31
第29回	古墳時代土師器分類図	33
第30回	古墳時代土師器遺構別集成図1	36
第31回	古墳時代土師器遺構別集成図2	37
第32回	古墳時代土師器遺構別集成図3	38
第33回	古墳時代土師器遺構別集成図4	39
第34回	長内遺跡及び仙台平野周辺の平底甕の形態	45

## 写真図版目次

図版1	I 区全景, S101堅穴建物跡(1)	54
図版2	S101堅穴建物跡(2)	55
図版3	S101堅穴建物跡(3), SX02性格不明遺構	56
図版4	S103堅穴建物跡	57
図版5	S104堅穴建物跡	58
図版6	SX05堅穴状遺構, S106堅穴建物跡	59
図版7	S107堅穴建物跡(1)	60
図版8	S107堅穴建物跡(2)	61
図版9	SX08性格不明遺構, 作業前風景、試掘トレンチ	
図版10	見学会	62
図版11	遺構出土器	63
図版12	S101堅穴建物跡 出土土器(1)	64
図版13	S101堅穴建物跡 出土土器(2)	65
図版14	S101堅穴建物跡 出土土器(3)	66
図版15	S101堅穴建物跡 出土土器(4)	67
図版16	S101堅穴建物跡 出土土器(5)	68
図版17	S104堅穴建物跡 出土土器(1)	69
図版18	S104堅穴建物跡 出土土器(2)	71
図版19	S107堅穴建物跡 出土土器(3), S103・S106堅穴建物跡, SX05堅穴状遺構 出土土器	72

## 第1章 調査に至る経緯

宮城県伊具郡丸森町館矢間山字長内に所在するこの地は、道幅2.5m程度の町道坪石長内線が供用されているが、旧国道に接続する坪石長内線の西側の出入り口が矮小であることから交通に支障があり、町道改良の要望が地域住民よりあがっていた。

平成28年8月に丸森町建設課より町道の改良工事の計画が示された。計画は現在の坪石長内線沿いに家屋が密集しているため、拡張が困難であることから、新たに町道長内2号線を整備するもので、総延長は約200m、幅員5m、総面積は1,500m<sup>2</sup>である。

計画地のほとんどが長内遺跡の範囲に含まれており、遺跡に及ぼす影響が大きいことが予想されたことから、関係機関で協議を重ねた結果、確認調査を実施した後、その成果を踏まえて、あらためて協議を行うこととした。

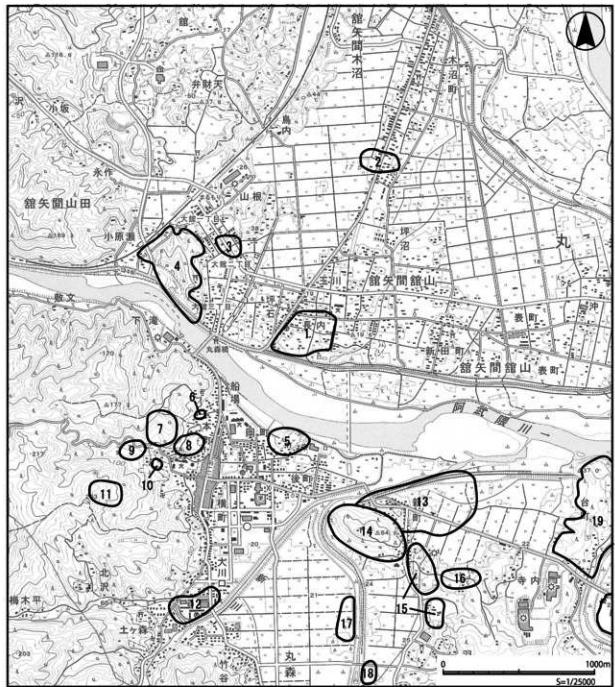
確認調査は平成29年4月24日に行った。8つのトレンチを設定し、約206m<sup>2</sup>の調査を行った結果、東進する約80mの区間では遺物・遺構は検出されなかったが、北進する約120mの区間のほぼ中央部で堅穴建物跡と思われるプランを検出した。精査したところ、炉跡と思われる焼け土部分や土師器片も確認されたため、再協議を行ったが、計画変更等による遺構の保存は困難であると判断されたことから、本調査を行うこととなった。



第1図 丸森町の位置



第2図 遺跡の位置



第3図 長内遺跡と周辺の遺跡

## 第2章 遺跡の概要

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

長内遺跡は丸森町館矢間山に所在し、館矢間地区南部の阿武隈川に沿って形成された標高17 m ~ 21 mの自然堤防上に立地する。

丸森町は仙台市から南に約45 kmに位置する宮城県最南端の町で、東に宮城県亘理郡山元町・福島県相馬郡新地町、西に宮城県白石市・福島県伊達市、南に福島県相馬市、北に宮城県角田市と境を接している。また、阿武隈急行線と国道349号線が町の北部から西部に、国道113号線が北部から南東部に走っている。

茨城県北部から延びる阿武隈山地は、1000 mクラスの山を形成しながら福島県を縦断し、丸森町に入ると次第に標高が低くなり、幅を狭めながら2段に分かれて標高200 m ~ 400 m前後の高地となる。丸森町はこの阿武隈山地の北東部に位置し、加えて東西支脈の峠点にあたるため、周囲に山に囲まれた盆地状になっており、全町の約70%は山林である。しかし、町の北部は伊具盆地に続く平野となっており、丸森・金山・小斎・館矢間地区では水田も多い。また、町の西部から北東部にかけて阿武隈川が流れている。

### 第2節 歴史的環境

今回調査を行った遺跡の周辺には縄文時代から近世までの遺跡が分布している（第3図）。長内遺跡は土器類・須恵器が採集される古代の散布地として知られており、これまでに行われた個人住宅建築による確認調査でも須恵器の小破片が出土したのみで、構造は確認されていなかった。

縄文時代の遺跡には、玉貫遺跡・高畠遺跡があり、玉貫遺跡では縄文時代後期～晩期にかけてのものと見られる土器片が採集されている。また、高畠遺跡では、昭和53年と平成18年に調査を実施しており、縄文時代前期～晩期に掛けての遺物が出土している（丸森町教育委員会1979・2008）。

弥生時代の遺跡では、塙合遺跡で土地の地目変更の際に中期の土器と石臼丁が見つかっているほか、大門前遺跡でも石臼丁や片刃石斧が採集されている。また、台町遺跡では平成28年の調査で中期と見られる堅穴建物跡が確認されている（丸森町教育委員会2017）。

古墳時代になると深山古墳・漆原古墳・台町古墳群・新町古墳群などの古墳時代中期～後期の古墳に加え、矢ノ目遺跡では、昭和34・35年に、南小泉式・栗原式の土器類・石製模造品が出土し、10棟以上の堅穴建物跡（原文では堅穴住居跡と記載）が確認されている（志間1964）。

古代の遺跡では、大古町遺跡で平成13～15年度に国道113号線バイパス改良工事に伴う発掘調査が行われ、堅穴建物跡3棟（報告書では堅穴住居跡3軒と記載）を検出した。住居跡出土の土器類から8世紀後半から9世紀頃のものと推定されている（丸森町教育委員会2003・2004）。

中世以降になると大橋館跡・丸山館・鳥屋館跡のような城館が分布するようになる。また、前述した大古町遺跡では中世以降の集落跡も発見されている。平成8～9年度に実施した桜づみ工事に伴う調査では、12世紀後半から13世紀前半の輸入陶器器、常滑窯の壺など、遠隔地で生産された遺物

番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	長内遺跡	自然堤防	集落	古墳前・古世	11	西山古墳群	丘陵	城郭	中世
2	保合遺跡	自然堤防	散在地	縄文～弥生	12	柳原遺跡	冲積平野	散布地	弥生～古墳
3	大門前遺跡	自然堤防	散在地	弥生	13	大古町遺跡	冲積平野	散布・散在地	古代～中世
4	大橋館跡	丘陵	城館	中世	14	丸山古墳群	丘陵	城郭・散在地	縄文～中世～近世
5	鳥屋館跡	丘陵	城館	中世	15	新町古墳群	丘陵	丘頂	古墳～後
6	塙合古墳	丘陵	古墳	古墳後	16	寺内田古墳群	丘陵斜面	散布地	弥生
7	西山城遺跡	丘陵	城館	中世	17	越田遺跡	自然堤防	散布地	古墳～近世
8	高畠遺跡	段丘	散在地	縄文早～晚	18	越田遺跡	自然堤防	散布地	古墳～近世
9	土井遺跡	丘陵斜面	散在地	縄文後～晚	19	台町古墳群	丘陵	前古墳中期～後	古墳～中世
10	櫛原古墳	丘陵斜面	丘頂	古墳後					

やかわらげが出土し、平泉廃絶後も鎌倉幕府とかかわりを持つような権力者が居住していたと考えられる（丸森町教育委員会 1999）。さらに、13～15 年度調査では井戸跡より伊達家の家紋である三引両紋が描かれた片口漆碗や「法度」と書かれた高札と見られる遺物が出土している。これらは、伊達植宗が居住した丸山館跡が機能していた時期と推定される年代と同時期で、関連があるものと考えられる（丸森町教育委員会 2003・2004）。

### 第3章 調査の方法と経過

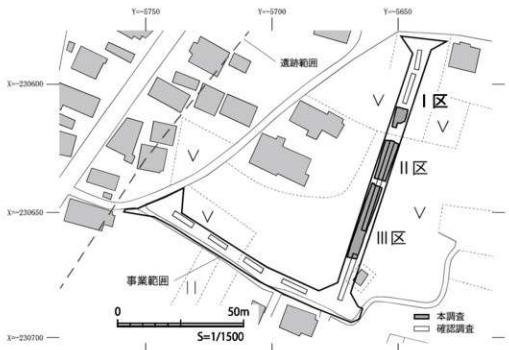
本発掘調査は平成 29 年 8 月 3 日から同年 10 月 20 日まで行なった。確認調査により遺構が確認された地点を中心に調査区を 3ヶ所設定し、これらを北側から I・II・III 区と呼称することとした（第 4 図）。8 月 3 日より I・II 区、4 日より III 区の調査を行った。

I 区では、遺構は検出されなかったが、II 区では、竪穴建物跡・性格不明遺構、III 区では、竪穴建物跡・竪穴状遺構を検出した。

10 月 6 日、町内の笛矢間小学校より発掘現場の見学（児童 44 名・引率 4 名）を受け入れて現場案内を行った。

10 月 20 日には発掘調査の大部分を終了し、遺物・図面の整理作業に着手した。これらの作業は平成 30 年 1 月 10 日に終了した。

調査面積は約 247 m<sup>2</sup>で、遺構確認面までの掘削は 0.25 m<sup>2</sup>のバックホーを使用して行った。検出した遺構は、調査区の中央部に 1～3 m 間隔で任意の点を設定して、南北方向の軸線とし、平面図を S=1/20 または 1/10、断面図は S=1/20 の手実測で作成している。記録写真はデジタルカメラを使用した。



第 4 図 調査区配置図

### 第4章 基本層序

I 層 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト層。表土。

II 層 暗褐色 (10YR4/6) 砂質シルト層。

III 層 暗褐色 (10YR4/4) 砂質シルト層。III 区南端において、III 層と IV 層の間にもう 1 枚の層を確認しているが、部分的な検出のため基本層位とはしなかった。この層は中世陶器を含むことから、中世以降の年代が想定される。したがって、これを覆う基本層位 III 層は中世以降の堆積層と考えられる。

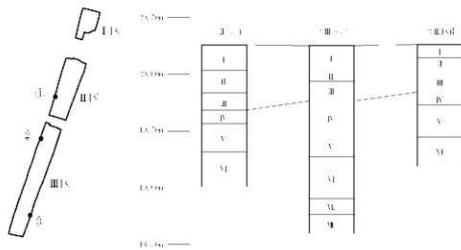
IV 層 暗褐色 (10YR4/4) 砂質シルト層。非常に均質であることから阿武隈川の洪水によって短時間に堆積した層と思われる。各遺構の検出面で、本遺跡ではこの層以下を地山と考えた。

V 層 暗褐色 (10YR4/4) 砂質シルト層。4 層と同じだがやや暗い色調を呈する。

VI 層 暗褐色 (10YR3/4) 砂質シルト層。5 層よりもさらに暗い色調を呈する。

VII 層 暗褐色 (10YR3/4) 砂層。

VIII 層 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂層。



第 5 図 基本層序

## 第5章 検出遺構と出土遺物

検出された遺構は、竪穴建物跡 5 様 (SI01・03・04・06・07)、竪穴状遺構 1 基 (SX05)、性格不明遺構 2 基 (SX02・08) である（第6図）。これらはいずれも基本層位IV層上面で検出された（以下、本書では基本層位IV層以下を地山と記述する）。これらの遺構から出土した遺物の内、口縁部または底部から体部が 1/6 以上残存するもの、破片資料だが特徴的なものについて実測図を掲載している。

### 第1節 古墳時代

#### A. 竪穴建物跡

##### 【SI01 竪穴建物跡】（第7図～第13図、第1表）

〔概要〕II区の北側に位置し、東西両端は調査区外に延びている。また、北端部は確認調査時に失われている。床面上で炭化材や焼土が検出されたことから焼失建物跡と考えられる。

〔平面形・規模〕平面は長方形であり、規模は北西—南東 5.3 m、北東—南西 4.6 m である。

〔方向〕南西辺で測ると北で西に 28° 偏る。

〔壁〕地山を壁として、床面からほぼ垂直に立ち上がる。高さは最も残りの良い南東辺で床面から 25 cm である。

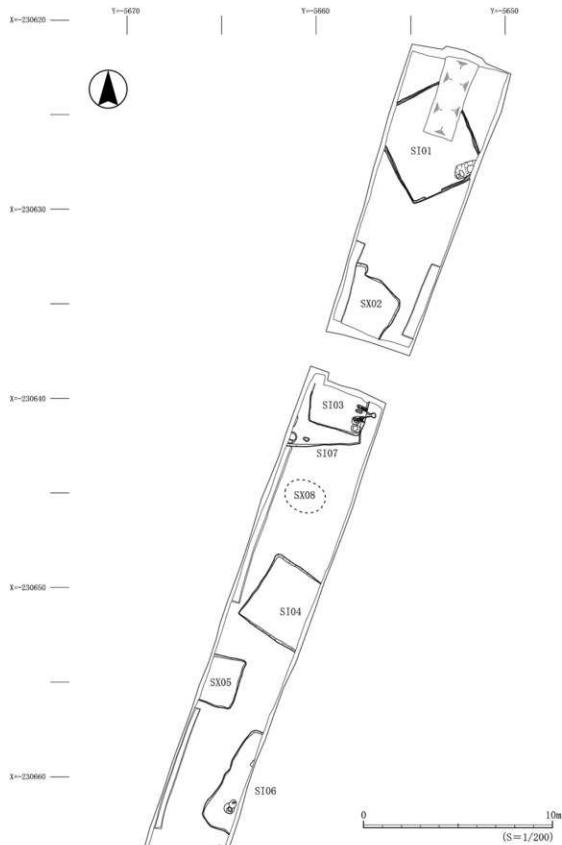
〔床面〕掘方埋土を床面としている。床面はほぼ平坦である。

〔炉跡〕やや北寄りで 1ヶ所検出した。規模は、長軸 70 cm 程、短軸 30 cm 以上である。

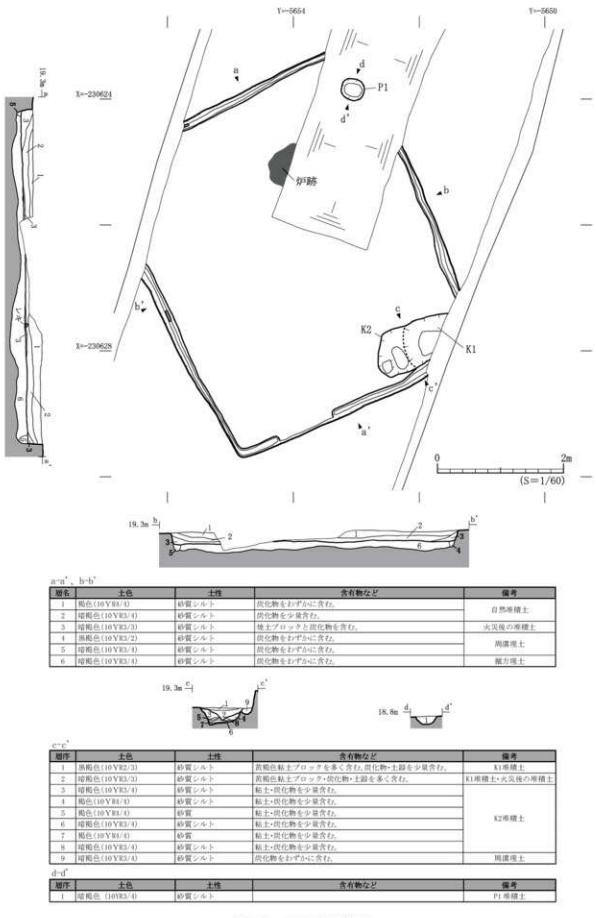
〔周溝〕南東辺の一部を除くほぼ全周で検出した。K1・K2 と重複し、これよりも古い。規模は上幅 5 ~ 15 cm、下幅 2 ~ 7 cm、深さは 9 ~ 15 cm、断面は「U」字形である。堆積土は地点によって異なり、4 層は南西側のみに分布する。4 層は黒褐色、5 層は暗褐色の砂質シルトであり、炭化物をわずかに含む。部分的に 4・5 層中から上方に細長く延びる黒褐色土（図版 3-3）を確認しており、これらは壁材痕跡の可能性も考えられよう。

〔土坑〕南東側で重複する 2 基の土坑を検出した (K1・K2)。K1 の東側は調査区外に延びている。K1・K2 は、はじめ 1 基の土坑として調査したが、底面が 2 つに分かれていることから、重複する 2 基の土坑であったと推定される。

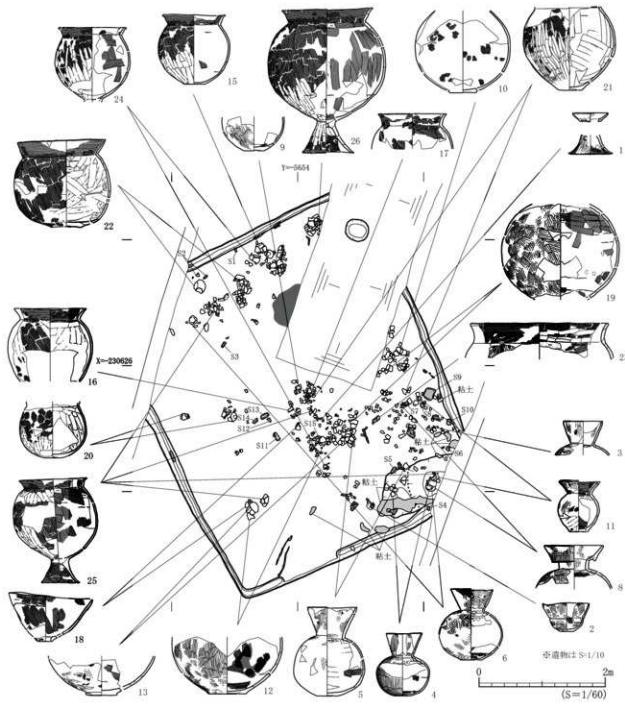
K1 は K2・周溝と重複し、これらより新しい。平面は長軸 80 cm 以上、短軸 60 cm 程の楕円形、深さ 40 cm 程とみられ、断面は逆台形である。堆積土は 2 層に分かれ、1 层は粘土ブロックを多く含み、炭化物を少量含む黒褐色砂質シルト、2 層は粘土ブロック・炭化物を少量含む暗褐色砂質シルトであり、いずれも自然堆積である。底面から土器師とともに、焼土・炭化物が検出されることから、火災時には開口していたものとみられる。K2 は K1・周溝と重複し、K1 よりも古く、周溝よりも新しい。平面は長軸 70 cm 程、短軸 60 cm 以上の楕円形、深さ 40 cm 程とみられ、断面は逆台形である。堆積土は 6 層に分かれ、3・6・8 層は粘土ブロック・炭化物を少量含む暗褐色砂質シルト、4 層は粘土ブロック・炭化物を少量含む褐色砂質シルト、5・7 層は粘土ブロック・炭化物を少量含む褐色砂であり、いずれも自然堆積である。



第6図 遺構配置図



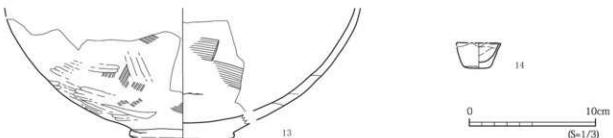
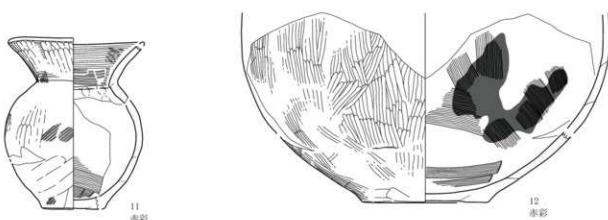
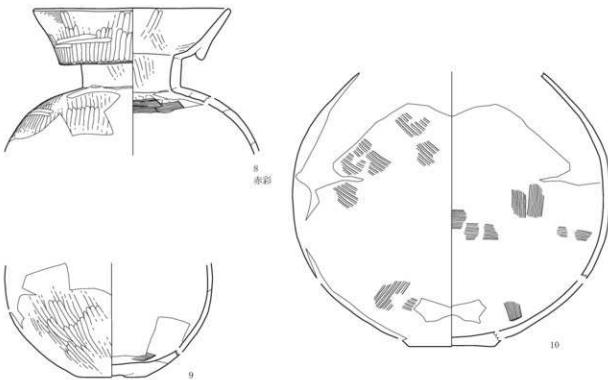
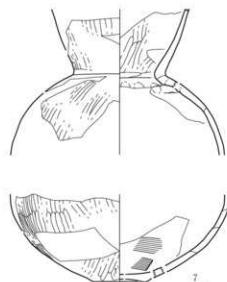
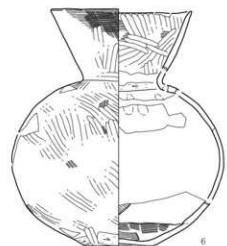
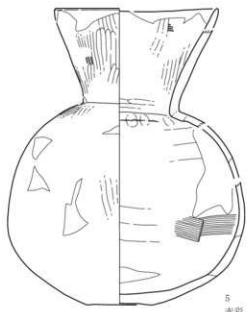
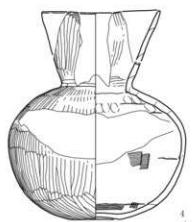
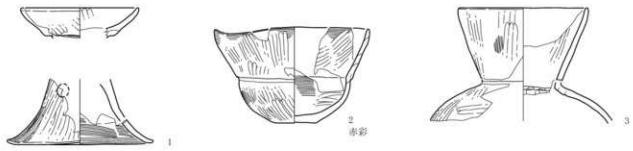
第7図 SI01 積穴建物跡



第8図 SI01 積穴建物跡 遺物出土状況

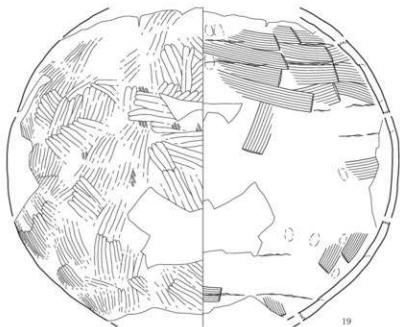
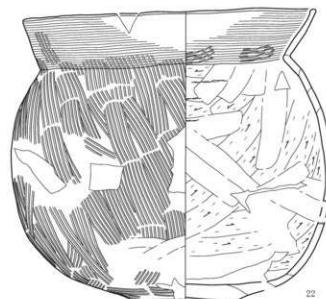
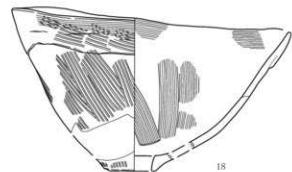
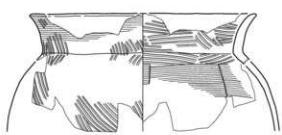
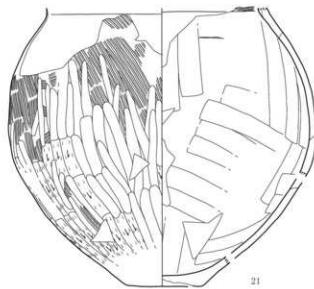
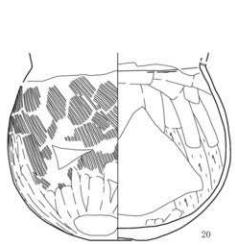
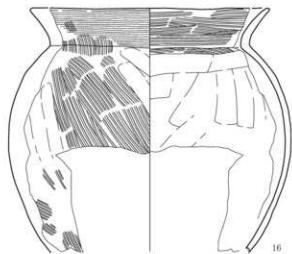
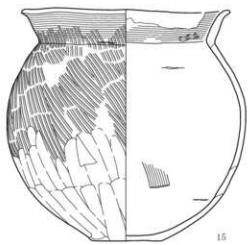
【その他】北側でピット1基(P1)を検出した。周囲が削平されているため床面・掘方堆土との関係は不明であるが、位置関係から竪穴建物に伴うと考えた。平面は径40cm程の円形である。残存する部分の深さは10cmであるが、上部は確認調査時に削平されており、本来はより深かったと考えられる。堆積土は1層であり、暗褐色粘質シルトの自然堆積である。他に、南東側を中心として床面・床面直上・K2上面で黄褐色粘土塊を検出した。

【堆積土】3層あり、1、2層は自然堆積である。床面上の2、3層からは他の竪穴建物跡と比較する



第9図 S101 竪穴建物跡 出土遺物(1)

第10図 S101 竪穴建物跡 出土遺物(2)



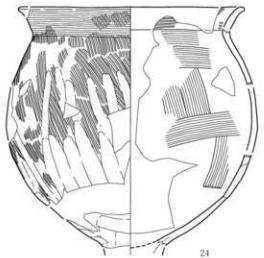
0 10cm  
(S=1/3)

第11図 S101 竪穴建物跡 出土遺物 (3)

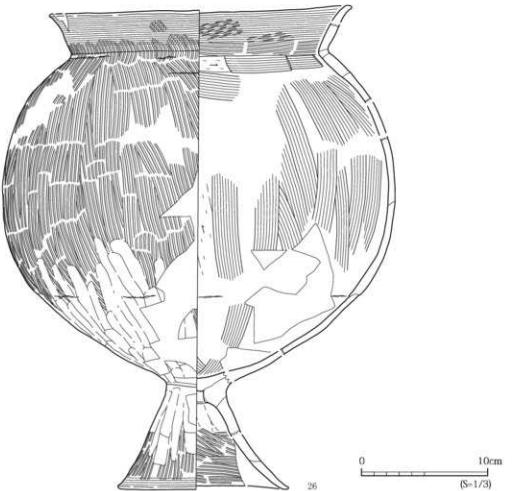


0 10cm  
(S=1/3)

第12図 S101 竪穴建物跡 出土遺物 (4)



21



第13図 SI01 竪穴建物跡 出土遺物 (5)

1表 S101 竪穴建物跡 出土遺物観察表

上級部	所	西行	立作	高作	脚本	特徴		年次	単題名
						内	外		
上級部	舞台	座面	1/3	(9.0)	11.6	内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	11-3	No. 1
上級部	座	座面	3/4	12.4	3.4	7.6 内(◎)ヨコヨリヘラミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	11-2	No. 2
上級部	座	座面	(1)~(6)	16.1	2.0 内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	11-3	No. 13	
上級部	座	座面	1/2	10.0	4.2 内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	11-4	No. 14	
上級部	座	座面	1/2	(9.0)	13.2	内(◎)ヨコヨリヘラミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	11-5	No. 18
上級部	座	座面	2/3	23.4	5.4 内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	11-6	No. 20	
上級部	座	座面	2/3	23.0	5.4 内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	11-7a	No. 60	
上級部	座	座面	1/3	4.2 内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	12-1	No. 21		
上級部	座	座面	1/3	15.7 内(◎)ヨコヨリヘラミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	12-2	No. 22		
上級部	座	座面	2/3	5.4 内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	12-3	No. 25		
上級部	座	座面	2/3	6.6 内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	12-4	No. 22		
上級部	座	座面	2/3	10.8	5.0 内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	12-5	No. 10	
上級部	座	座面	2/3	17.2	10.0 内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	12-6	No. 12	
上級部	座	座面	1/3	8.3 内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	12-7	No. 10		
上級部	座	座面	1/3	13.5	2.0 内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	13-1	No. 1	
上級部	座	座面	1/3	16.6	5.6 内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	13-2	No. 5	
上級部	座	座面	1/3	(19.0)	5.0 内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	13-3	No. 6	
上級部	座	座面	1/3	18.0	5.0 内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	13-4	No. 7	
上級部	座	座面	1/3	18.0	5.0 内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	13-5	No. 8	
上級部	座	座面	1/3	22.2	3.5 内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	13-6	No. 16	
上級部	座	座面	1/3	23.0	3.5 内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	13-7	No. 21	
上級部	座	座面	2/3	3/4	6.0 内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	13-8	No. 22	
上級部	座	座面	1/3	6.0 内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	13-9	No. 23		
上級部	座	座面	1/3	23.1	7.0 内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	14-1	No. 9	
上級部	座	座面	1/3	22.2	7.0 内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	14-2	No. 8	
上級部	座	座面	1/3	(36.6)	4.0 内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	14-3	No. 7	
上級部	座	座面	1/3	(36.6)	4.0 内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	14-4	No. 8	
上級部	座	座面	1/3	38.6	4.0 内(◎)ヘリミサキ(ハ)マメコニナード・リギウ(内(◎)ヘラミサキ(ハ)マメコニナード)	リギウ	14-5	No. 1	

やや残りは悪いものの、焼土や炭化物・炭化材などが面的に検出されていることから、この建物跡火災に遭ったものと考えられる。

【出土遺物】床面・K1 底面・堆積土から土師器鉢・器台・壺・甕・台付甕・有孔鉢・手捏土器や被熱した礫などが出土している（第8図）。

北東壁付近では土師器甕（第11図15・第12図22）、台付甕（第13図26）などが個体ごとにまとめて残ったような状態で検出された。これらは火災直前の位置を比較的良く保っているものと考えられる。一方、床中央付近には蓋が多く、破片が比較的広い範囲に散乱したような状態で検出された。これらは火災直後の倒壊個体により、多くの蓋が転落から移動してしまったものとされる。また

底面では壺の口縁部（第9図6、第10図8・11）、台付壺の台部（第13図25）など比較的の残存率

の高い破片がまとめて検出された（図版 2-4）。これらは床面や堆積土出土の破片と接合することから、K1 が埋まつていて周囲から流れ込んだものと考えられる。

〔炭化材・焼土〕床面上や床面からやや浮いた状態で炭化材・焼土を検出した。炭化材は壁に直交・斜交するもの・並行するもの・板材の可能性があるものなどが検出された。焼土は炭化材とともに床面上に堆積している。

#### 【S104 積穴建物跡】（第 14 図～第 17 図、第 2 表）

〔概要〕Ⅲ区の中央やや北寄りにあり、東側は調査区外に延びている。床面上で炭化材や焼土が検出されたことから焼失建物跡と考えられる。

〔平面形・規模〕平面形は方形と思われ、規模は南北が西辺で 3.8 m、東西が南辺で 3.6 m 以上である。

〔方向〕西辺で測ると北で東に 36° 傾る。

〔壁〕地山を壁として、床面からほぼ垂直に立ち上がる。高さは最も残りの良い南辺で床面から 70 cm である。

〔床面〕中央部はにぶい黄褐色シルトなどで貼床されており、それ以外の壁に近い部分は掘方埋土上面を床面としている。床面はほぼ平坦であるが、貼床された場所は周辺よりやや高くなっている。

〔炉跡〕やや北西寄りで 1 か所検出した。不整円形で、直径が 30 cm 程度であり、東側は硬く焼け締まっていた。この硬化面に接して被熱した細長い礫（第 15 図 SI）が検出されたが、炉跡に伴うものかどうかは不明である。

〔堆積土〕9 層あり、最上部の 1 層は他と比べ均質でやや黄色味の強い砂を多く含むことから、洪水などの影響で短期間に堆積した可能性がある。床面直上の 6 ～ 9 層には多量の焼土や炭化物、炭化材などが含まれることから、この建物跡は大火に遭ったものと考えられる。

〔出土遺物〕床面や堆積土から土器師器・器台・壺・甕・有孔鉢・手捏土器や小礫が出土した（第 15 図）。

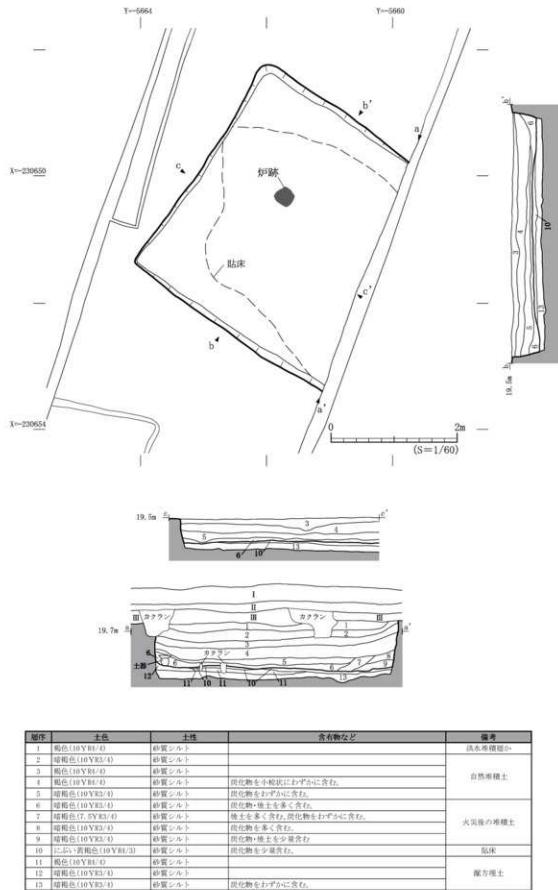
炉跡の西脇では土器師器 2 個体（第 17 図 11・12）と器台（第 16 図 4）がまとめて潰れたような状態で検出された。また、北辺の調査区東壁際では二重口縁壺の口縁部から肩部（第 17 図 9）が逆位で検出され、その脇では片口付きの甕（第 17 図 10）に有孔鉢（第 17 図 8）が入れ子状になって出土した（図版 5-5・6）。周辺からは単純口縁壺（第 17 図 7）、手捏土器（第 16 図 6）などが出土している。これらは火災直前の位置を良く保っていると思われる。

〔炭化材・焼土〕床面上や床面からやや浮いた状態で多量の炭化材と焼土が検出された。炭化材は、壁に直交するものや斜交するものが多いが、壁際で立った状態で検出されたものがあった。大半は細長い棒状のものであるが、西側では幅 3 mm 程の植物をまとめて束にしたようなものが検出された。焼土は大部分が炭化材とともに床面上に堆積しており、北側では焼土塊が検出された。

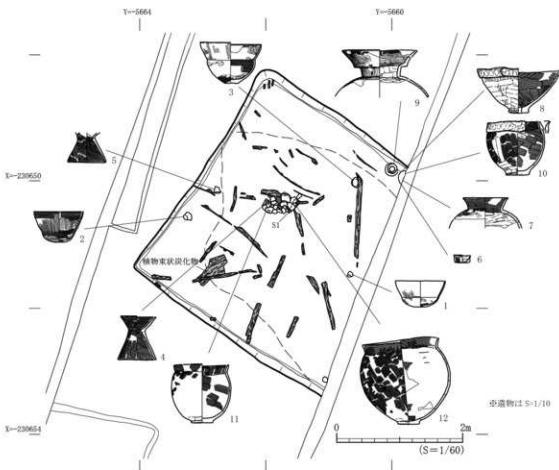
#### 【S106 積穴建物跡】（第 18 図、第 19 図）

〔概要〕Ⅲ区の南側にあり、西側の一部を検出した。大半は東側の調査区外に延びている。床面上で炭化材や焼土が検出されたことから焼失建物跡と思われる。また、主柱穴が 2 時期あることから 1 度建て替えられている。

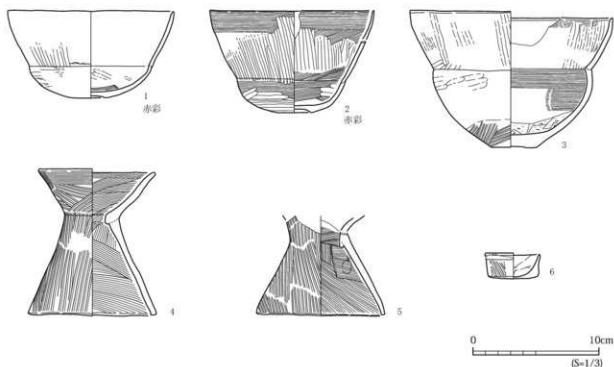
〔平面形・規模〕平面形は方形と思われ、規模は南北が西辺で 5.6 m、東西が南辺で 1.9 m 以上である。



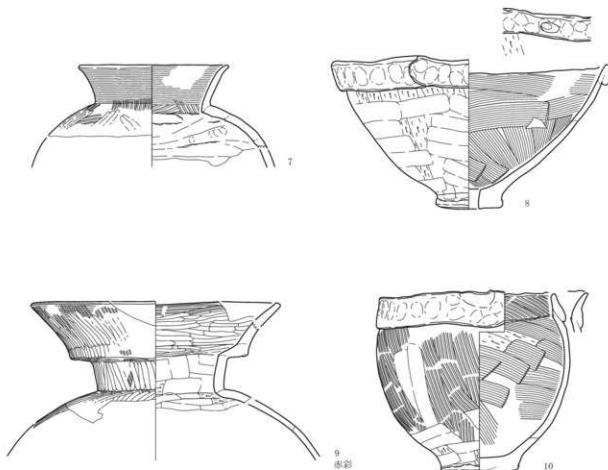
第 14 図 S104 積穴建物跡



第15図 SI04 竪穴建物跡 遺物出土状況



第16図 SI04 竪穴建物跡 出土遺物 (1)



第17図 SI04 竪穴建物跡 出土遺物 (2)

第2表 SI04 積穴建物跡 出土遺物観察表

番号	種類	層	保存	口径	底径	高さ	特徴		学年区分	目録番号
							内(上)～外(下)	内(下)～外(上)		
1	土師器 鋸	床面	1/2	(13.2)	2.8	6.9	内(上)～外(下)カタツムリ(体)ヘラミヨリ・赤鉄 内(上)～白(下)小明・赤鉄(鉄)ヘラミヤ ～ガラス・セメント瓦・瓦面	内(下)～外(上)白(下)小明	16-1	No.37
2	土師器 鋸	床面	2/3	13.0	2.6	8.0	内(上)～外(下)ヨコナラヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦(体)カタツムリヘラミヨリ・ガラス・セメント 内(下)～外(上)ヨコナラヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦(体)カタツムリヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦	内(下)～外(上)白(下)小明	16-2	No.26
3	土師器 鋸	床面	1/1(定形)	16.0	3.6	10.5	内(上)～外(下)ヨコナラヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦(体)カタツムリヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦	内(下)～外(上)白(下)小明	16-3	No.28
4	土器類 盆	床面	1/1(定形)	9.4	16.2	11.6	内(上)～外(下)ヨコナラヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦(体)カタツムリヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦	内(下)～外(上)白(下)小明	16-4	No.34
5	土器類 盆	床面	脚部		10.3		内(上)～外(下)ヨコナラヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦(体)カタツムリヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦	内(下)～外(上)白(下)小明	16-5	No.27
6	土器類 盆	床面	1/1(定形)	1.0	2.0		内(上)～外(下)ヨコナラヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦(体)カタツムリヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦	内(下)～外(上)白(下)小明	16-6	No.33
7	土師器 盆	床面	0/1～1/1	12.0			内(上)～外(下)ヨコナラヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦(体)カタツムリヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦 内(下)～外(上)ヨコナラヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦(体)カタツムリヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦	内(下)～外(上)白(下)小明	16-7	No.32
8	土器類 盆	床面	1/1(定形)	22.3	5.3	12.1	内(上)～外(下)ヨコナラヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦(体)カタツムリヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦 内(下)～外(上)ヨコナラヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦(体)カタツムリヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦	内(下)～外(上)白(下)小明	16-8,a,b	No.31
9	土師器 壺	床面	0/0～1/0	19.6			内(上)～外(下)ヨコナラヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦(体)カタツムリヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦 内(下)～外(上)ヨコナラヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦(体)カタツムリヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦	内(下)～外(上)白(下)小明	16-9	No.29
10	土師器 壺	床面	1/1(定形)	14.0	6.2	11.3	内(上)～外(下)ヨコナラヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦(体)カタツムリヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦 内(下)～外(上)ヨコナラヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦(体)カタツムリヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦	内(下)～外(上)白(下)小明	17-1	No.30
11	土師器 壺	床面	1/1(定形)	14.6	5.8	15.3	内(上)～外(下)ヨコナラヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦(体)カタツムリヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦 内(下)～外(上)ヨコナラヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦(体)カタツムリヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦	内(下)～外(上)白(下)小明	17-2	No.31
12	土師器 壺	床面	1/1(定形)	20.3	5.7	23.0	内(上)～外(下)ヨコナラヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦(体)カタツムリヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦 内(下)～外(上)ヨコナラヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦(体)カタツムリヘラミヨリ・ガラス・セメント瓦	内(下)～外(上)白(下)小明	17-3	No.36

[方向] 西辺で測ると北で東に 31° 傾る。

[壁] 地山を壁として、基本的に床面から垂直に立ち上がる。しかし、西辺南半部から南西隅にかけては壁が緩やかに立ち上がる場所があり、直線的ではなくなっている。高さは最も残りの良い北辺で床面から 60 cm である。

[床面] 挖方埋土上面を床面としている。

[主柱穴] 南西側で重複する 2 個 (P2,P3) と、調査区東壁で部分的に確認できた 1 個 (P1) を検出した。

P2 は P3 より新しく、長径 50 cm、短径 40 cm 程の楕円形で、深さは 60 cm である。柱跡跡は長径 20 cm、短径 10 cm の長方形に近い楕円形である。P3 は北半を P2 に壊されているが直径 60 cm 程の円形で、深さは 60 cm である。

[堆積土] 4 層あり、最上部の 1 層は SI04 の 1 層と同様の特徴を示し、洪水などの影響で短期間に堆積した可能性がある。床面上直の 4 層には焼土と炭化物が多く含まれることから、この建物跡は火災に遭ったものと考えられる。

[出土遺物] 床面上直・堆積土から土器師壺 (第 19 図)、不明金属製品が出土した。

#### 【SI07 積穴建物跡】(第 20 図～第 23 図)

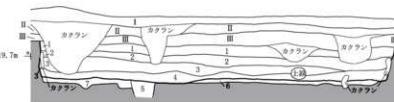
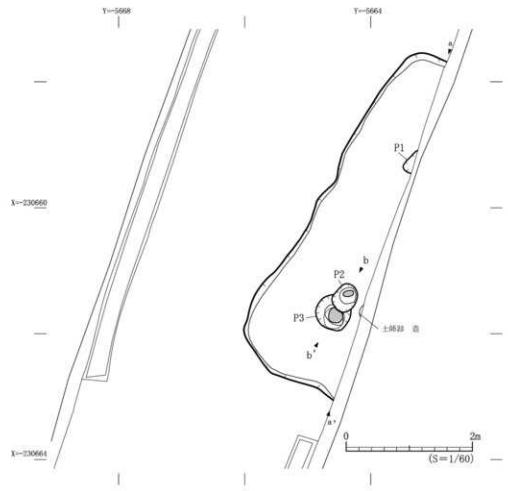
[概要] Ⅲ 区の北端にあり、北・西側は調査区外に延びている。床面上直炭化物や焼土が検出されたことから焼失建物跡と思われる。また、主柱穴が 2 時期あることから 1 度建て替えられている。

[重複] SI03 積穴建物跡と重複し、これより古い。

[平面形・規模] 平面形は方形と思われ、規模は南北が 3.8 m 以上、東西が南辺で 3.8 m 以上である。

[方向] 東辺で測ると北で西に 3° 傾る。

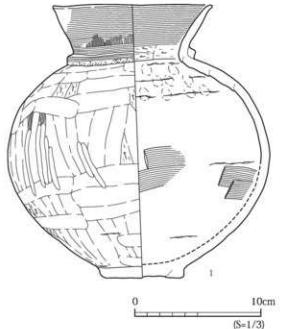
[壁] 地山を壁として、やや外側に傾斜を持って立ち上がる。高さは最も残りの良い南辺で床面から 80 cm である。



番号	土色	土性	含有机物など	備考
1	褐色(10YR1/6)	砂質シルト	10YR5/6を黄褐色の土を多く含む	出土未確認
2	褐色(10YR1/4)	砂質シルト	10YR5/6を黄褐色の土をわずかに含む	自然地盤土
3	褐色(10YR2/4)	砂質シルト	炭化物を含む	自然地盤土
4	褐色(10YR2/4)	砂質シルト	炭化物を含む	火災後の堆积土
5	褐色(10YR2/4)	砂質シルト	炭化物を含む	P1周囲土
6	褐色(10YR2/4)	砂質シルト	炭化物を含む	褐色地盤
7	褐色(10YR1/4)	砂質シルト	砂質シルト	褐色地盤



第 18 図 SI06 積穴建物跡



測量							測量範囲		測量範囲	
面積	幅	奥行	口径	底径	高さ	測量	測量範囲	測量範囲	測量範囲	
1 土柱跡 破	床直	円筒形	12.6	6.6	21.6	内(口)ヘケメーラコナデ(8)ハケメーラケズリーカゲー ヘラモガホヘタガホ 内(口)ヘケメーラコナデ(8)ヌビオサコヘラナガ	19-3	No.39		

第19図 S106堅穴建物跡 出土遺物

〔床面〕掘方埋土上面を床面としており、炉の周辺に黄褐色土などを用いて貼床している。床面はほぼ平坦であるが炉の周辺がやや高くなっている。

〔主柱穴〕南東側で重複する2個(P2,P3)と、調査区西壁で部分的に確認できた1個(P1)を検出した。

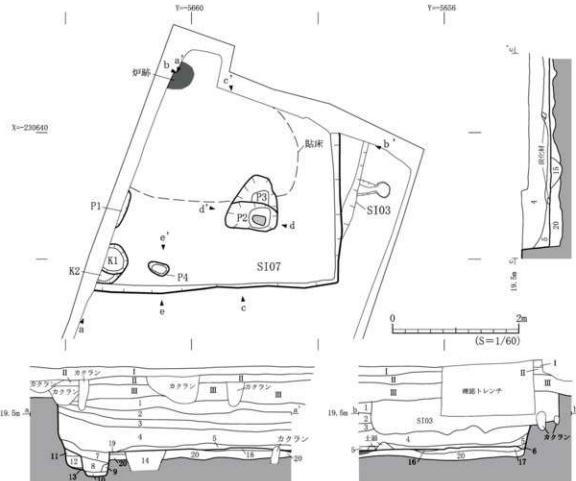
P2はP3より新しく、長径80cm、短径40cm程の長楕円形で、深さは70cmである。柱痕跡は長径20cm、短径10cmの長方形に近い楕円形である。P3は南半をP2に壊されており平面形等は不明であるが、深さは60cmである。

〔炉跡〕III区の北西隅で部分的に検出した。南北50cm程であり、中心付近は硬く焼け縮まっている。主柱穴との位置関係から建物の中央や北西寄りにあったものと考えられる。なお、炉跡の南端には20cm程の礫が2個（第21図S3・S4）並んでいた。これらは被熱していたが、それが火災によるものなのか炉の影響なのかは判断できなかった。

〔土坑〕建物南壁際の南西の主柱穴付近で、重複する2基の土坑を検出した(K1, K2)。西側は調査区外に延びている。新しいK1は径50cm程の円形、もしくは楕円形で深さは40cmである。堆積土下部から上部には焼土や炭化物が多量に入り込んでいることから、火災時には開口していたと思われる。一方。最下層には焼土などが入らないことから火災時には既に堆積していたと考えられる。K2はK1に壊されており規模等は不明であるが、深さは30cmである。自然堆積でK2がほぼ埋まってから新たにK1を掘り込んでいる。

〔堆積土〕7層あり、上部の1、2層は均質で洪水堆積層であると思われる。床面直上の5～7層には多量の焼土や炭化物、炭化材などが含まれることから、この建物跡は火災に遭ったものと考えられる。

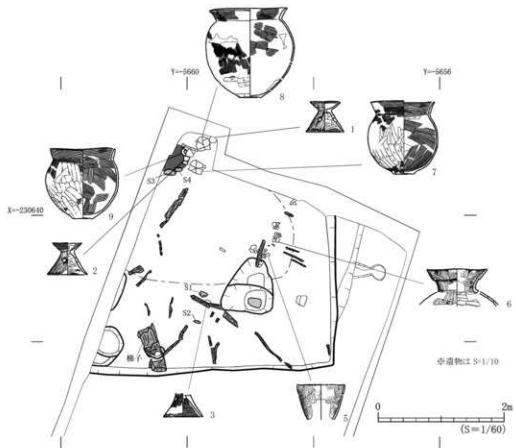
〔出土遺物〕堆積土や床面から土器器鉢・器台・壺・甕や小礫が出土した（第21図）。



順序	土色	土性	含有机物など	備考
1	赤褐色(10YR 4/3)	砂質シルト		洪水堆積層
2	黄褐色(10YR 5/8)	砂質シルト		
3	暗褐色(10YR 3/0)	砂質シルト		
4	褐色(10YR 4/4)	砂質シルト	炭化物を少く含む	自然堆積土
5	黒褐色(10YR 2/0)	砂質シルト	炭化物を多く含む	
6	褐褐色(10YR 2/0)	砂質シルト	土中に少量炭化物	火災時の堆積土
7	褐色(10YR 4/3)	砂質シルト	炭化物を多く含む	
8	暗褐色(10YR 3/0)	シルト	炭化物を多く含む	
9	にじみ黄褐色(10YR 3/0)	シルト	炭化物を多く含む	火災時の堆積土
10	灰褐色(10YR 1/2)	砂質		K1構造時の堆積土
11	褐色(10YR 4/0)	砂質シルト		K2堆積土
12	褐色(10YR 4/0)	シルト		
13	にじみ黄褐色(10YR 4/0)	シルト	堆積が途中したもの	
14	にじみ黄褐色(10YR 4/0)	シルト	堆積の表面をブロック状に削て多く含む	P1堆積地盤
15	暗褐色(10YR 3/0)	砂質シルト	堆積の砂が含む	P2堆積地盤
16	褐色(10YR 4/0)	砂質シルト		
17	褐色(10YR 4/0)	砂質		泥炭
18	褐色(10YR 4/0)	砂質		
19	褐色(10YR 4/0)	砂質シルト		
20	にじみ黄褐色(10YR 4/0)	砂質シルト	堆積の砂を削めて多く含む	解剖地盤



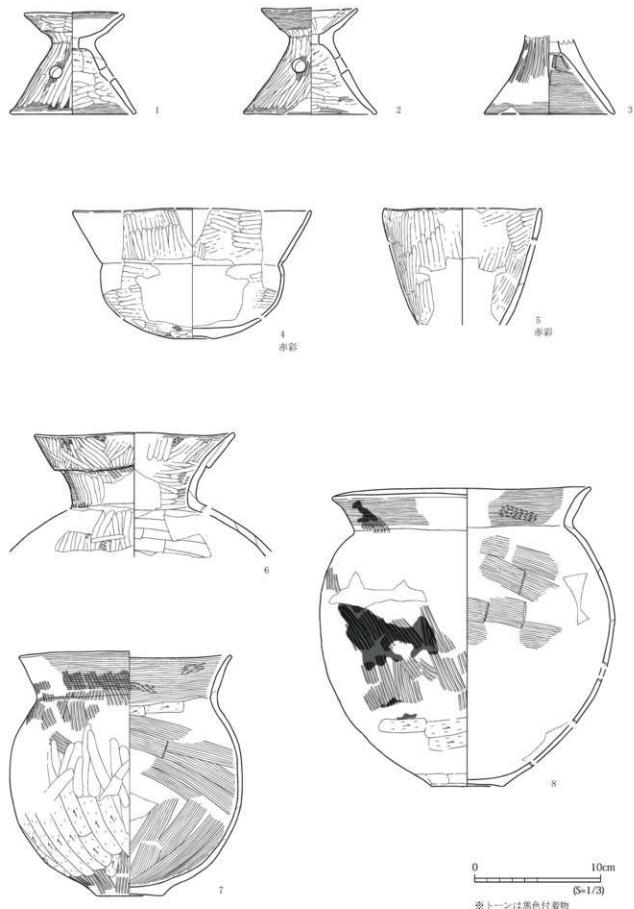
第20図 S107堅穴建物跡



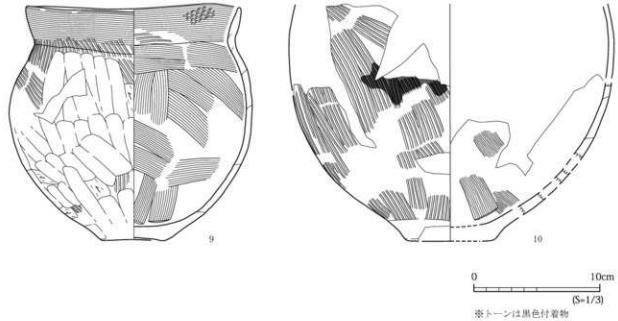
第21図 S107 竪穴建物跡 遺物出土状況

東側では4層下部から土師器甕（第23図10）、壺（第22図5・6）などが出土した。これらは比較的大きめの破片には復元したが、完形品になることはなかった。一方、炉跡及びその周辺の床面では土師器甕3個体（第22図7・8、第23図9）、器台2個体（第22図1・2）が個体ごとにまとまつてつぶれたような状態で検出され、ほぼ完形に復元できた。したがって、炉跡周辺の遺物は火災直前の位置を良く保っていると思われ、建物跡東側の遺物は何らかの原因で移動してしまった可能性が考えられる。

〔炭化材・焼土〕床面上や床面からやや浮いた状態で多量の炭化材と焼土が検出された。炭化材は大半は細長い棒状のものであるが、厚さ2cm程度の板状のものもある。方向は建物の壁に直交するものと斜交するものがあり、壁際に多く中心部には少ない。焼土は炭化材とともに床面上に堆積している。〔梯子〕南壁際で炭化した梯子を検出した（図版7-3）。位置関係から建物内に出入りするに使用されていたと思われる。板を素材としており、足をかけるステップを削り出したものである。残存する大きさは幅30cm、長さ80cm程で、ステップの間隔は30cm程である。また、梯子の下の床面で、南壁から20cm離れたところで、長径30cm、短径20cm、深さ10cmのピットを検出した（P4）。ピット内には焼土などが入り込んでおり、火災時には開口していたものと考えられる。南壁や梯子との位置関係から梯子を固定するためのピットであった可能性が考えられる。



第22図 S107 竪穴建物跡 出土遺物 (1)



第 23 図 SI07 竪穴建物跡 出土遺物 (2)

番号	距離	埋	残存	口径	深度	高さ	特徴		寸法範囲(単位:cm)	参考文献
							内(1)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(2)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ヨコナデ→内(3)ヨコヨコゾーハウリガキ 内(4)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ	内(1)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(2)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(3)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(4)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ		
1 土師器 釜	土師器 釜	床面	完形	7.0	10.0	8.1	内(1)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(2)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ヨコナデ→内(3)ヨコヨコゾーハウリガキ 内(4)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ	内(1)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(2)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(3)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(4)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ	17-4	No. 41
2 土師器 釜	土師器 釜	炉構上	ほぼ完形	7.6	10.6	8.1	内(1)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(2)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(3)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(4)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ	内(1)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(2)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(3)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(4)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ	17-5	No. 41
3 土師器 釜	土師器 釜	底面	脚部	10.4			内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ	内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ	17-6	No. 49
4 土師器 釜	土師器 釜	堆積土	1/2	10.0	3.1	10.3	内(1)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(2)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(3)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(4)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ	内(1)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(2)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(3)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(4)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ	10-1	No. 50
5 土師器 釜	土師器 釜	堆積土	4層	(11)/1/(12)	16.0		内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ	内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ	18-2	No. 48
6 土師器 釜	土師器 釜	堆積土	4層	(13)/1/(14)	16.0		内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ	内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ	18-3	No. 47
7 土師器 甕	土師器 甕	炉構上	ほぼ完形	16.9	5.4	19.3	内(1)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(2)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(3)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(4)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ	内(1)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(2)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(3)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(4)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ	18-4	No. 42
8 土師器 甕	土師器 甕	炉構上	ほぼ完形	20.6	5.6	23.7	内(1)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(2)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(3)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(4)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ	内(1)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(2)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(3)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(4)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ	18-5	No. 45
9 土師器 甕	土師器 甕	炉構上	ほぼ完形	17.1	5.0	16.7	内(1)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(2)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(3)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(4)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ	内(1)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(2)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(3)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内(4)ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ	19-1	No. 43
10 土師器 甕	土師器 甕	堆積土	4層	(15)～(16)	(7.0)		内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ	内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ 内・ヨコヨコゾーハウリガキ(刷毛)ハメ→ヨコヨコゾーハウリガキ	19-2	No. 48

## 第 2 節 古代

### A. 竪穴建物跡

#### 【SI03 竪穴建物跡】(第 24 図、第 25 図)

〔概要〕Ⅲ区北端にあり、北側の一部は調査区外に延びている。古墳時代前期のSI07 竪穴建物跡と重複し、これより新しい。

〔平面形・規模〕平面形は方形で、規模は東西が南辺で 3.1 m、南北が西辺で 2.1 m 以上である。

〔方向〕西辺で測ると北で東に 10° 傾する。

〔壁〕東辺では地山を、それ以外では SI07 竪穴建物跡の堆積土を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。高さは最も残りの良い西辺で床面から 0.4 m である。

〔床面〕中央部では貼床をして床面としており、壁に近い部分は掘方土裏上面を床面としている。床面はほぼ平坦で、貼床の厚さは 5 cm 程度である。

〔カマド〕東辺南側に付設されている。石組のカマド側壁や掘抜きの煙道、煙出しピットを検出した。

カマド側壁は、据え穴に長さ 80 cm、幅 40 cm 程度の自然縫（第 24 図 K51 ～ K58）を長軸方向に据えて立て並べたもので、焼土や炭化物を含むカマド構築土で固定されている。側壁間に燃焼部となっており、幅 50 cm、奥行き 60 cm 程度で、中央部は焼けて赤茶色になっていた。煙道はトンネル状に掘りぬかれており、幅 20 cm、長さ 50 cm である。煙出しピット底面は煙道の底面よりも若干深く、直径 20 cm である。

カマド除去後に、北側壁の南側で古い据え穴と思われる浅いピットが検出された。カマド構築土に焼土や炭化物が含まれていたことから、カマドが 1 度造り替えられている可能性が考えられる。

〔土坑〕カマド右側の建物跡南東隅で浅い皿状の土坑 1 基を検出した (K1)。南北 50 cm、東西 40 cm、深さ 10 cm 程度である。

〔堆積土〕4 層あり、大半を占める 1・2 層は均質でやや黄色味の強い砂を多く含むことから、この建物跡は廃絶後あまり時間置かず以降水などの影響で埋没した可能性が考えられる。

〔出土遺物〕床面から発見 5 点 (第 24 図 S1 ～ S5) が出土した。カマドの近くにあった縄は被熱で劣化しており、本来はカマドに使用されていた可能性がある。床面近くの堆積土からいずれも破片であるが、筒形土器 (第 25 図 1)、土師器壺・甕、須恵器甕? の破片が出土した。土師器壺・甕はロクロ調整されている。

### B. 竪穴状遺構

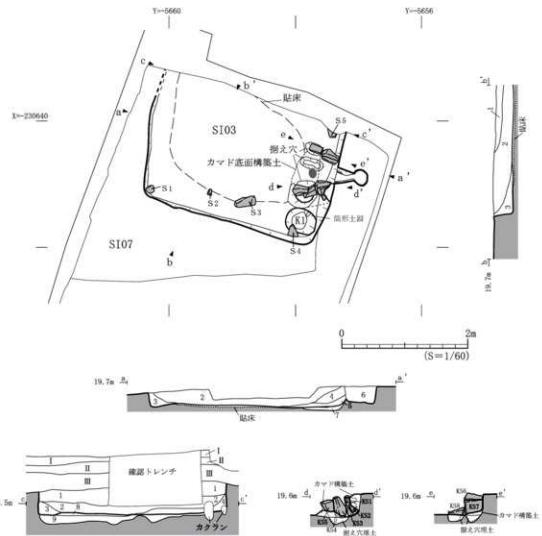
#### 【SX05 竪穴状遺構】(第 26 図、第 27 図)

〔概要〕Ⅲ区中央にあり、西側は調査区外に延びている。掘り込みはあるものの、明瞭な床面等が検出されなかつたため、竪穴状遺構とした。

〔平面形・規模〕平面形は方形で、規模は南北が東辺で 2.8 m、東西が南辺で 1.8 m 以上である。

〔方向〕東辺で測ると北で東に 18° 傾する。

〔壁〕地山を壁として、床面からやや傾斜を持って立ち上がる。高さは最も残りの良い北辺で床面か



ら 60 cm である。

〔床面〕 挖方埋土上面が床面と考えられるが、踏み固められたり、炭化物等が散布しているような状況はなかった。

〔カマド〕 調査した範囲内では存在しないが、北辺の調査区西壁付近には焼土や炭化物を多く含む層(4 層)があることから、付近にカマドが存在した可能性は考えられる。

〔堆積土〕 5 層あり、4 層以外は自然堆積土である。4 層は炭化物・焼土を含むことから、カマドに関する可能性、あるいは人為的に投棄された可能性がある。

〔出土遺物〕 堆積土から土師器壺の破片、須恵器壺(第 27 図 1)が出土し、造構確認時に土師器壺の破片(第 27 図 2)が出土した。

### 第 3 節 その他の造構・遺物

#### A. 性格不明造構

##### 【SX02 性格不明造構】(第 28 図)

〔概要〕 II 区南端で北東部部分を検出した。褐色土が落ち込んでおり、土器片が出土したため堅穴建物の可能性を考えて調査したが、明瞭な床面、柱穴、炉、周溝などは検出されず堅穴建物ではないと判断した。

〔平面形・規模〕 南・西側が調査区外に伸びているため平面形は不明で、確認した範囲は東西 2.9 m 以上、南北 3.1 m 以上で、深さは 0.4 m ほどである。

〔壁〕 緩やかに立ち上がり、人為的な掘り込みかどうか判然としない。

〔底面〕 いくぶん凹凸があるが、概ね平坦である。

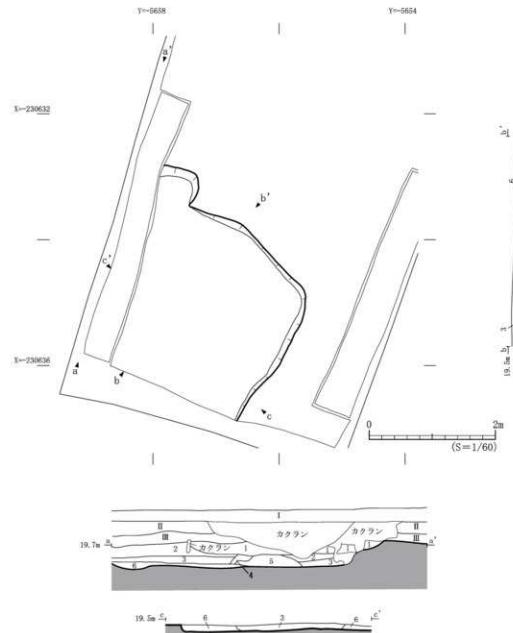
〔堆積土〕 6 層に大別される。1 層は均質な褐色のシルトで洪流水堆積土である。4 層は黄色土のブロックを多く含む層であり、5 層は炭化物を多く含む層で、いずれも調査区西壁際にのみ存在する人為的に投棄された層と思われる。2、3、6 層は周辺から流れ込んだ自然堆積層である。

〔出土遺物〕 堆積土各層から少量の土師器甕・壺の小破片が出土した。また、5 層から不明銅製品が出土した。

##### 【SX08 性格不明造構】(第 6 図)

〔概要〕 III 区の SI04 堅穴建物跡と SI07 堅穴建物跡の間で、およそ東西 3 m、南北 2 m の範囲に小礫が散漫に分布していた(図版 9-1)。周辺からは古墳時代前期の土師器片も出土したため精査したが、平面プラン等は確認できなかった。

〔出土遺物〕 小甕 9 個と少量の土師器片が出土した。



層序	土名	含有物など	備考
1	褐色(10YR 8/3)	砂質シルト	洪流水堆積土
2	自然褐色(10YR 2/2)	砂質シルト	自然堆積土
3	褐色(10YR 3/2)	砂質シルト	自然堆積土
4	褐色(10YR 3/2)	シルト	黄色土のブロックを含む。
5	褐色(10YR 2/2)	砂質シルト	炭化物を多く含む。
6	(10YR 3/2)-褐色(10YR 3/2)	砂質シルト	人為的堆土

第 28 図 SX02 性格不明造構

## 第6章 総括

### 第1節 古墳時代

#### (1) 遺物

SI01、SI04、SI06、SI07を中心で多数の土師器が出土している。ここでは、これらの土師器の特徴をまとめ、編年の位置づけについて検討する。実測図を掲載した土器についてその数を集計した(第2表)。なお、直接の接合関係を持たないものでも、色調や器面などの特徴から同一個体と判断されるものは1個体として扱っている。また、出土層位については、複数の層から出土した破片が接合している場合、主体となる層で代表させている。以下ではまず土器の分類を行い、それをもとに遺構ごとの出土状況・特徴をまとめ、編年の位置づけを行う。

#### 1) 分類

器形などの特徴が比較的明瞭なものを対象として分類を行った(第29図)。欠損部があるものでも、残存している部位から凡そその法量や形態が推定できるもの、特徴的なものについては分類の対象とした。

#### 【鉢】

I類：器高6.9～8.0cm、口径12.4～13.2cmの小型品で、半球形の体部と、長く直線的に外傾し端部で緩く内湾する口縁部を持つ、いわゆる小型丸底鉢と呼ばれるもの。器形の特徴から細分される。

I a類：底部は平底で、器高の中央付近に強い屈曲を持つもの(第9図2)。

I b類：底部は凹底で、器高の中央より下位に屈曲を持つもの(第16図1・2)。

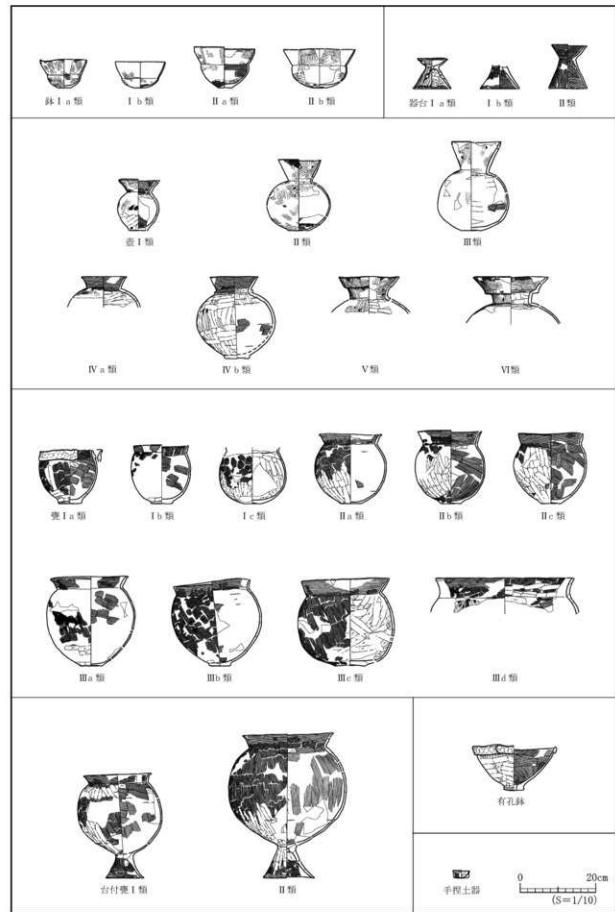
II類：器高10.3～10.8cm、口径16.0～19.0cmの大型品で、体部から口縁部にかけての屈曲が器高の中央より上位にあるもの。器形の特徴から細分される。

II a類：底部が平底を呈し、底部から体下部にかけてなだらかに立ち上がるもの(第16図3)。

II b類：底部が凹底を呈し、底部から体下部が外側に大きく開くもの(第22図4)。

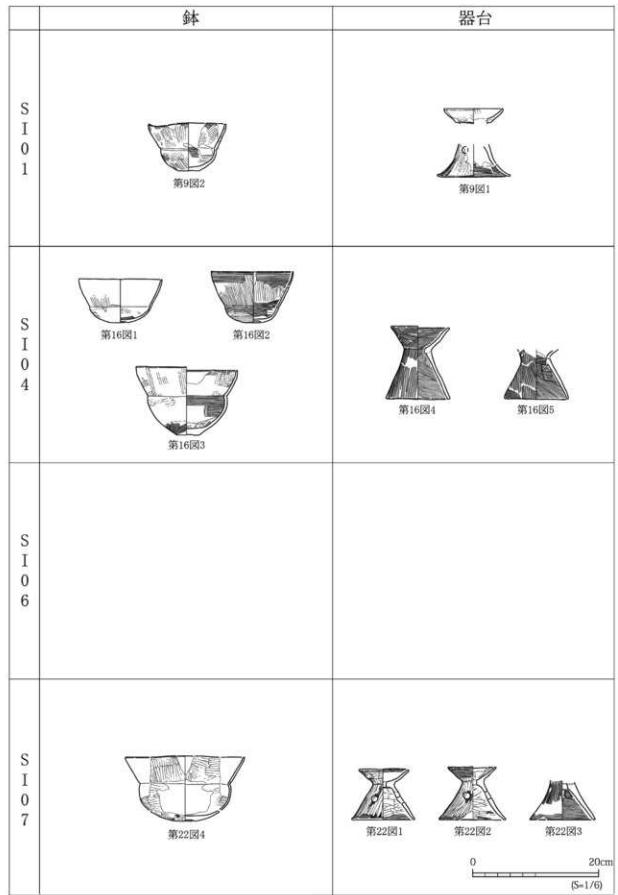
第3表 古墳時代土師器個体数

	鉢	器台	壺	甕	甌	台付甌	有孔甌	手捏土器	計
SI01	床面 1	1	8	5	3	1	1		20
	床底				1				1
	堆積1								3
SI04	器1	1	12	7	3	1	3	1	26
	堆積1	2	2	2	3		1	1	11
	堆積1	1							1
SI06	計	3	2	2	3	1	1	12	
	床底								1
SI07	計								1
	床面		2		3				5
	床底		1						1
	堆積1	1		2	1				4
	堆積1	1	3	2	4				10
合計									
25									

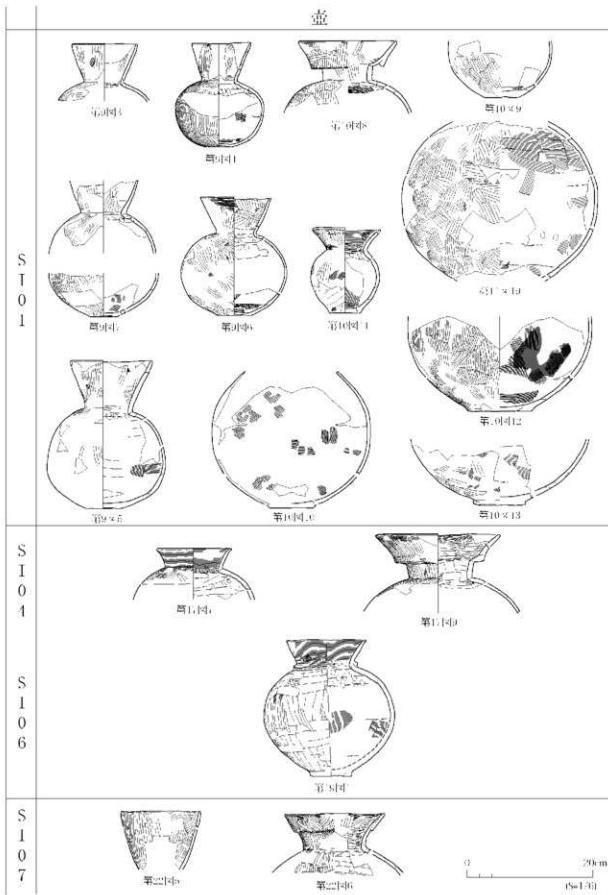


第29図 古墳時代土器分類図

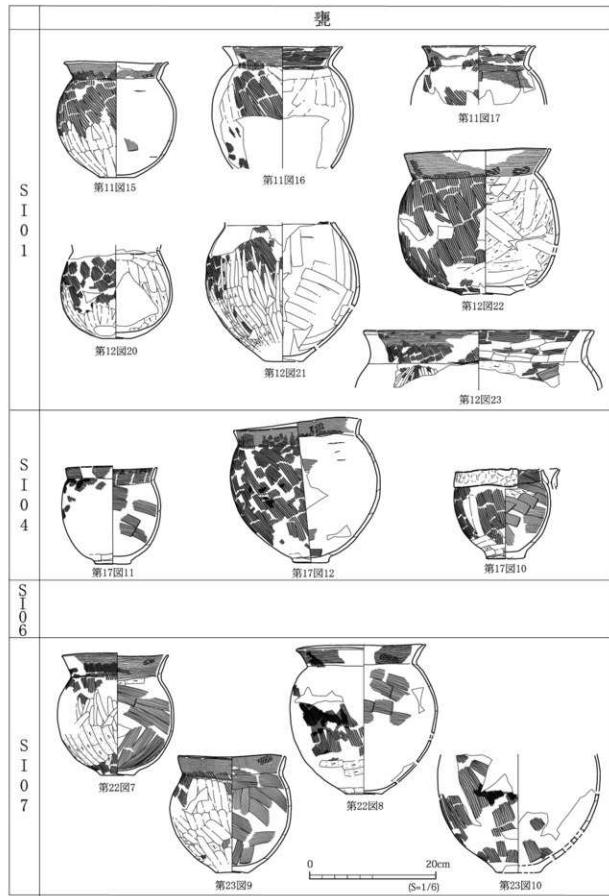




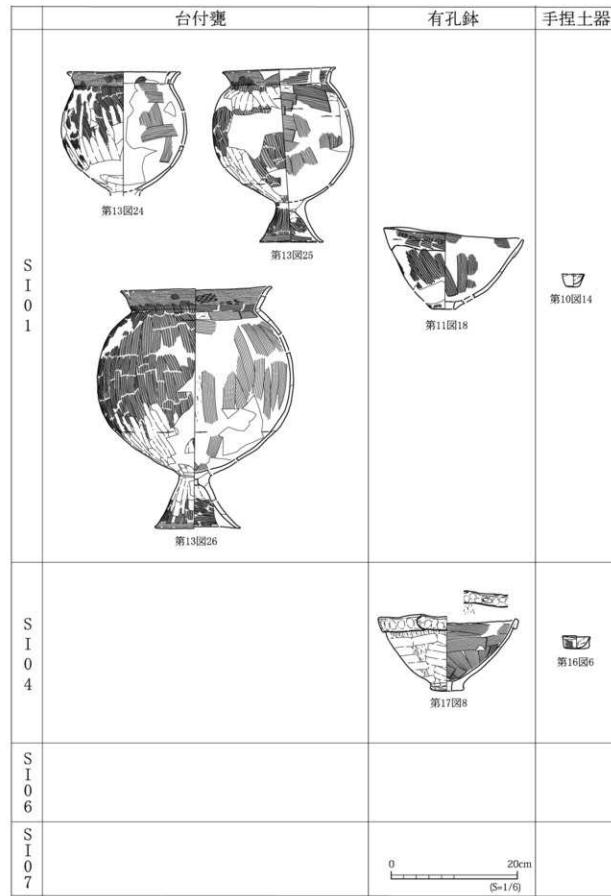
第 30 図 古墳時代土師器遺構別集成図 (1)



第 31 図 古墳時代土師器遺構別集成図 (2)



第32図 古墳時代土師器遺構別集成図(3)



第33図 古墳時代土師器遺構別集成図(4)

VI類、甕IIa類、IIIa類、IIIc類、台付甕I類、II類、有孔鉢、手捏土器であり、他に体部上半を欠く大小の壺、口縁部を欠く大型の甕が出土している。小型器台（器台Ia類）と小型丸底鉢（鉢Ia類）のセット関係が見られること、直口甕（甕II類、III類）5個体、二重口縁甕（甕VI類）1個体の他、分類不明のものも含めると11個体の甕が出土していること、平底甕（甕IIa類、IIIa類、IIIc類、分類不明）5個体と共に台付甕（台付甕I類、II類）3個体が出土している点が特徴と考えられる。

壺は小型のI・II類、中型のIII類、大型のVI類、分類不明の大型品・小型品で構成され、他の堅穴建物跡と比べて特に出土数が多い。これらは内面の体部上半に輪積み痕と指頭圧痕が顕著であること、器面調整として外面全体と口頸部内面に丁寧なヘラミガキ、体部内面にはヘラナデ・ナデが施されることを共通の特徴とする。また、器面が摩滅したものは一部に一次調整のハケメが見られる。

甕は中型のIIa類（第11図15）、大型のIIIa類（第11図16・17）、IIIc類（第12図22）、口縁部を欠く大型品（第12図21）で構成される。これらはいずれも球形の体部を持ち、器面調整として外面全体に右下がりのハケメ、口縁部内面に横または斜めのハケメを施した後、口縁部内外面をヨコナデ、外面の体部下半を中心にヘラケズリやナデ、体部内面にヘラナデやナデを施すことを基本的な特徴とする。第11図15は、底部にもナデが施され、平坦に調整されている。甕IIIc類（第12図22）については、器形や器面調整に他の甕とは異なる特徴があり、5)で詳述する。

台付甕は小型のI類（第13図24・25）と大型のII類（第13図26）で構成される。甕部の器形・器面調整は平底甕と基本的に共通する。体部下半の内外面に比較的明瞭な輪積み痕が見られ、それより下では器壁が薄くなっている。台部は形態的に貫通孔を有する器台に類似し、貫通孔部分に甕の底部を差し込むように接合していると見られる。また接合に先立ち、器台の受部内面に当たる部分には指頭圧痕が施されている。また台部の接地面はやや平坦になっている。

器種構成において平底甕が煮沸具の主体を占める点は塙釜式の一般的な器種構成と共通するが、SI01堅穴建物跡のように台付甕が一定量を占める例は稀である。台付甕は、宮城県内の遺跡では平底甕に伴い単独で出土する例、台部のみの例、いわゆるS字甕の口縁部のみ出土する例が多く、SI01堅穴建物跡のように平底甕に伴って一つの構造から3個体出土している例は、石巻市田道町遺跡第9号住居跡（石巻市教育委員会1995）に限られる。また、県内の他遺跡の例を見ると、台部の付け根はより太く、端部まで内湾気味あるいは直線的に聞くものが多く、本遺跡例とは器形が異なる。また、体部と台部との接合方法も異なるとみられる。

床面直上からは甕IIId類が出土している。III d類（第12図23）は復元口径36cmの大型品とみられる。器形・器面調整は床面出土の甕と基本的に共通するが、口縁部先端付近の外面に弱い棱が形成される点、体部外面上にヘラミガキが施される点は特徴的である。

堆積土からは甕Ic類と体部上半を欠く大型の甕が出土している。Ic類（第12図20）は器壁が薄く、甕IIIc類同様、器形や器面調整には他の甕とは異なる特徴があり、5)で詳述する。第10図10は大型の壺とみられ、器形的には床面出土の壺と大きな差はみられない。

床面直上及び堆積土出土の土器は、基本的に床面及びKI底面出土の土器と明瞭な特徴の違いは見られず、ほぼ同時期のものとみられる。

#### 【SI04 堅穴建物跡】

全体で12個体の土器が出土している。内11個体は焼失した建物跡床面から出土しており、これらは一括性が高いものとみられる。内訳としては鉢Ib類、IIa類、器台II類、甕IVa類、VI類、甕Ia類・Ib類・IIIb類、有孔鉢、手捏土器、受部を欠く器台からなる。塙釜式の器種構成の内、高坏と台付甕以外の器種が揃っている。小型丸底鉢（鉢Ib類）が見られる他、片口付の甕（甕Ia類）はあまり類例がなく特徴的と言える。

壺は器面調整などの特徴についてはSI01堅穴建物跡と基本的に共通しているが、甕VI類（第17図9）は胎土が他の土器とやや異なり、鉛物が融出したものと見られる褐色粒がみられる。また、体部上半の破断面は強く摩滅してやや滑らかになっており、器台に転用されたものとみられる。

甕は小型のIa類（第17図10）・Ib類（第17図11）と大型のIIIb類（第17図12）で構成される。これらは器形的には、頭部の継まりが弱く、口縁部が短く直立気味となる点、底部が突出する点などが共通する。また甕Ib類とIIIb類は底部中央がくぼむ輪台技法の痕跡が見られない特徴がある。器面調整は基本的にSI01堅穴建物跡出土の甕と共通するが、口縁部内面にハケメが比較的明瞭に残される特徴がある。甕Ia類（第17図10）は体部の器面調整後に、粘土帶を貼り付けて複合口縁とし、その一部を外側に摘み出すようにして、片口を作り出している。複合口縁部外側には接合時の指頭圧痕が残り、端部は凹凸が残されたままとなっている。底部は器壁が厚く、中央がくぼむ輪台技法の痕跡が見られる。

有孔鉢（第17図8）は口縁部の一箇所に、先端が丸い棒状の工具による刺突、あるいは豆類の圧痕のような跡が見られる。また、複合口縁部外側に指頭圧痕が明瞭で、端部には凹凸が残される点、底部が突出する点などは、甕Ia類と共通性が見られる。

堆積土からは鉢Ib類が出土している。鉢Ib類（第16図1）は、床面出土の第16図2と器形と器面調整、赤彩の施される範囲が共通しており、同時期のものとみられる。

特徴的な出土状況として、北壁際で有孔鉢（第17図8）が片口付の甕（同図10）に入れ子になった状態で出土した。類似する状況で出土した資料に蔵王町六角遺跡SI231（蔵王町教育委員会2008）、石巻市新金沼遺跡第18号住居跡（石巻市教育委員会2003）がある。六角遺跡では、建物跡の南壁際で片口付の甕に有孔鉢が入れ子になったものが、そのまま横倒しになったような状態で出土している。新金沼遺跡では、建物跡北東隅で有孔鉢が甕の上に載った状態で出土している。いずれの例も有孔鉢は小型～中型の甕と組み合わされており、壁際に近い位置で出土している。壁際に近い位置での特徴的な出土状況については、土器の「収納時」の状態とする解釈も示されており（桐生1987）、土器の使用法・建物内の空間利用を反映している可能性も考えられる。

また、坪跡上では、甕2個体（第17図11・12）と粗製の器台1個体（第16図4）がその場で潰れたような状態で出土した。甕はいずれも表面が摩滅しており、部分的に黒色付着物が見られるなど使用の痕跡がうかがえる。器台は使用の痕跡とは断定できないが、表面が摩滅しており、出土状況から支脚（桐生1988）など坪に関係する使用法も想定される。

### 【SI06 穫穴建物跡】

床面直上から壺IV b 類が1個体出土している。壺IV b 類（第19図1）は、頸部に隆帯を貼り付けている点以外は、SI04から出土した壺IV a 類（第17図7）と基本的に共通した特徴を持つ。頸部の隆帯の外側には貼り付ける際に、工具を押し付けたと見られる細かなくぼみが連続しており、その後頸部との境目をヨコナデにより目立たなくしているとみられる。

### 【SI07 穫穴建物跡】

全体で10個体の土器が出土している。焼失した建物跡床面からは5個体が出土しており、これらは一括性が高いものと見られる。ここでまずは、床面出土資料について述べ、堆積土出土資料と比較することで、時間差の有無などについて検討する。

床面からは器台I a 類、壺II b 類、II c 類、III a 類が出土している。壺は中型のII b 類・II c 類、大型のIII a 類で構成される。他に口縁部から体部上半を欠く大型の壺が出土している。壺の器形・器面調整は他の竪穴建物跡と基本的に共通している。中型の壺の底部は、調整によって凹凸を少なくしていると見られる。

床面直上から器台I b 類が出土している。堆積土から鉢II b 類、壺III類、V類、口縁部から体部上半を欠く大型の壺が出土している。また、個体数には含めていないが、床面直上で大型の壺の体部破片が出土している。鉢II b 類（第22図4）の器面調整は、SI01・SI04出土の鉢I 類と基本的に共通している。壺類（第22図5・6）についても、器面調整の特徴などは、他の竪穴建物跡出土の壺類と共通している。床面直上及び堆積土出土土器と床面出土土器との間に、明確な特徴の違いは見られず、ほぼ同時期のものとみられる。

特徴的な出土状況として、炉跡の周辺から壺3個体（第22図7・8・第23図9）と小型器台2個体（第22図1・2）がその場で潰れたような状態で出土しており、SI04竪穴建物跡と類似する。第22図8の壺は、表面が摩滅しており一部に黒色付着物が見られるなど使用の痕跡がうかがえる。他の2個体も表面がやや摩滅し赤化している。小型器台2個体は表面がやや摩滅し、第22図2には赤化も見られる。これらは出土状況から使用あるいは火災による器面の変化とみられる。

### 3) 編年の位置付け

前述のように、各竪穴建物跡から出土した土器は、細かな差はあるものの、器種構成・器形・器面調整などの基本的特徴が共通しており、ほぼ同時期の資料とみることができる。これらと類似した土器は県南部では、蔵王町六角遺跡（蔵王町教育委員会2008）、亘理町宮前遺跡（宮城県教育委員会1983）、岩沼市北原遺跡（宮城県教育委員会1993）などで出土している。これらは古墳時代前期の「塙釜式」（氏家1957）として捉えられている。塙釜式土器に関しては、主に宮城県域の資料をもとに細別が試みられている。丹羽茂氏は塙釜式を3段階4時期に細別し（宮城県教育委員会1983、1985）、それをもとに次山淳氏は高杯・小型丸底鉢・壺の3器種の変遷を軸に6段階の細分案を示した（次山1992）。またこれらを踏まえ、辻秀人氏は東北地方の古式土器の変遷を示す中で、塙釜式にあたる時期について大別2期、細別6期に細分している（辻1994・1995）。さらに、これらの成果に基づき

青山博樹氏は仙台平野を中心とした地域を対象に塙釜式の大別3時期、細別6時期の変遷を示している（青山2010）。これらの編年案と対比することによって、長内遺跡SI01・04・06・07から出土した土器群について編年の位置付けを行う。

SI01 穫穴建物跡出土土器には、小型丸底鉢（鉢I a 類）と小型器台（器台I a 類）のセット関係が見られる。小型丸底鉢は辻氏編年III-1期に出現し、小型器台とのセットが確立するとされる（辻1995）。青山氏も小型丸底鉢など畿内に系譜のある土器の出現を塙釜式における画期として、その時期を塙釜2式古相としている（青山2010）。青山氏によると、出現期の小型丸底鉢はその名の通り丸底で、内外面に丁寧なヘラミガキが施されるとされ、次の塙釜2式新相には、底部の厚みが増し、底面に小さなくぼみを持つ凹底を有する特徴として定着し、塙釜3式古相には調整の粗雑化が進むとされる。このような変遷の中でSI01出土の器台・小型丸底鉢は辻氏III-1～2期、青山氏塙釜2式古相～新相に位置付けられると考えられる。また直口壺の体部形状がやや扁平である点、壺の体部形状が球形に近い点なども段階の特徴と一致する。

SI04 穫穴建物跡出土土器には、小型器台が見られないが、精製段階の小型丸底鉢（鉢I b 類）を組成すること、壺の体部形状の特徴などからSI01出土土器と同時期のものと考えられる。

SI07 穫穴建物跡から出土した、小型丸底鉢を大型化したような鉢（鉢II b 類）は、青山氏塙釜2式新相に出現するとされる（青山2010）。また、円窓3個を持つ小型器台（器台I a 類）や球形に近い体部形状を持つ壺が主体となる点などから、SI01出土土器と同時期のものと考えられる。

SI06 穫穴建物跡から出土した頸部の付け根に隆帯を残らせる壺（壺IV b 類）は、青山氏編年塙釜1式～3式古相まで確認されており、この時間幅に収まるものと考えられる。さらに、SI06を含む4棟はいずれも焼失建物跡であり、これらが別々に火災に遭ったと考えることは難しいため、いずれも同時期のものと捉えておきたい。

### 4) 長内遺跡出土の平底壺について

ここでは、仙台平野周辺地域に見られる同時期の資料との比較を通して、本遺跡出土土器の特徴を検討する。特に、一定の数量が出土しており、器形的特徴が明らかな平底壺を対象として、辻氏III-1～2期、青山氏塙釜2式古相～新相に位置付けられる資料との比較を行うこととする。

第34図は、長内遺跡と仙台平野周辺地域の遺跡から出土した平底壺の外形を、底部と中央軸線を基準として重ねたものである。対象としたのは、同時期の遺構から全体の器形が分かる平底壺が複数出土しており比較を行うことが可能であった、亘理町宮前遺跡22・38・49号住居跡（宮城県教育委員会1983）、岩沼市北原遺跡（宮城県教育委員会1993）、仙台市大野田古墳群SI2・3竪穴建物跡（仙台市教育委員会2009）、同市沼向遺跡SI21・926・927・3101竪穴建物跡（仙台市教育委員会2010）である。長内遺跡出土平底壺は、器高を基準にすると小型のI類、中型のII類、大型のIII類に分けることができた。これと概ね対応するように、他の遺跡についても器高16cm以下、18～20cm程、22cm以上の3グループに分け、グループごとに比較を行った。

全体として、遺跡ごと、個体ごとに多様な器形が存在するが、北原遺跡を除く3遺跡はいずれも

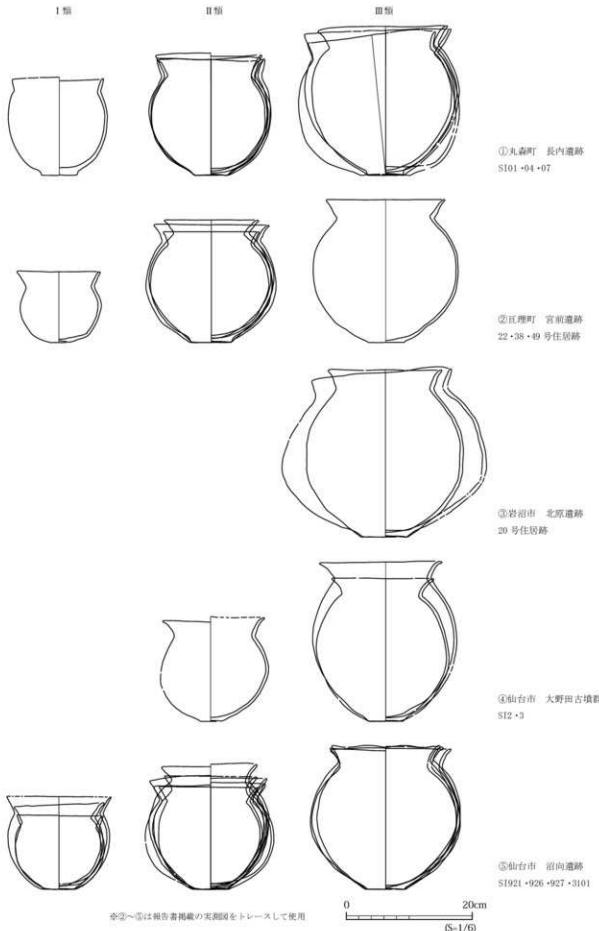
体部上半が頸部に向かって強くすぼまり、口縁部が強く外反する傾向が見られる。北原遺跡では、あまり類例のない器形の甕が含まれており、これに当たるまらないが、仙台平野から阿武隈川河口域にかけては、頸部から口縁部にかけての器形は基本的に共通すると考えられる。これらと比較した場合、長内遺跡出土平底甕の器形上の特徴として、頸部の縮みが弱い、口縁部の外傾度が弱い、という2点を指摘できる。また、2)で述べたように、底部の中央がくぼむ輪台技法の痕跡が顕著でない甕が多いことも特徴の一つと考えられる。これは、輪台技法を用いていないか、調整によって底部中央のくぼみを目立たなくしているためと考えられる。

このように長内遺跡出土の平底甕は、仙台平野周辺地域とは異なる特徴を持つと考えられる。こうした特徴が、近隣地域に広がりを持つのか、本遺跡に点的に見られるものなのかは、周辺に同時期の遺跡が多くないことから、今後の検討すべき課題と考えられる。

#### 5) S101 積穴建物跡出土の内面へラケズリ調整主体の甕について

甕III c類（第12図22）は、体部下半が膨らむことによりやや横に広がったような体部形状を呈しており、底径も広い。口縁部はやや内湾し、端部内面に弱い肥厚が認められる。また、体部内面の器面調整としてヘラケズリが主体となる点に特徴がある。このような特徴は塙釜式の一般的な甕には見られないものである。類似した事例として、仙台市下ノ内遺跡S113住居跡（仙台市教育委員会1990）、名取市野田山遺跡1号住居跡（名取市教育委員会2002）出土土器が挙げられる。下ノ内遺跡S113住居跡からは底部が丸底の甕が出土している。野田山遺跡第1号住居跡からは、丸底の底部、内面へラケズリ、体部外面への細かい原体によるハケ調整、端部を揃め上げた口縁部などを特徴とする甕が出土している。これらの甕は、畿内で中心とする布留式土器の甕の影響を受けたものと評価されている。布留式土器の甕には、いくつかの形態が存在するとされている。その中で布留形甕（寺沢1986）は、内湾口縁、端部内面の肥厚、肩部への横ハケ、丸底の底部、内面へラケズリにより薄く仕上げられた器壁などが特徴とされる。甕III c類は、口縁部形態や内面の器面調整などに布留形甕と類似した要素を指摘でき、体部形状を布留形甕に近いものとする意識もうかがわれる。一方、本遺跡出土の他の甕と同様の斜め方向のハケメが見られ、平底を呈し、器壁も厚く、口縁端部内面の肥厚も弱いなど、本来の作り方とは異なる点も多く、胎土は他の土器と共通している。これらのことから甕III c類は、布留形甕の影響を受け、在地で製作された模倣品と考えられる。また、甕I c類（第12図20）についても、体部内面にナデ調整に先立つヘラケズリが見られ、体部下半が膨らむ形状なども甕III c類と類似しており、同様の理解ができる可能性がある。

下ノ内遺跡、野田山遺跡の例はそれぞれ、青山氏塙釜2式古相と2式新相に位置付けられており、本遺跡と同時期のものと言える。青山氏によると塙釜2式は、塙釜式土器の中に畿内の要素の出現が集中する時期とされており、本遺跡の甕もそのような例の一つと考えられる。



第34図 長内遺跡及び仙台平野周辺の平底甕の器形

## (2) 遺構

### 1) 編年的位置づけ

前述したように、4棟の竪穴建物跡の床面を中心に出土した土器は古墳時代前期のもので、辻氏編年III-1～2期、青山氏編年塩釜2式古相～新相に位置付けることが可能と考えられる。これらは、遺構の廃絶時期を示しており、4棟の竪穴住居跡は、古墳時代前期のものと考えられる。

## 2) 構造

4棟の堅穴建物跡は、いずれも現標高 20 m 程の自然堤防上に立地しており、建物跡同士に顕著な標高差はない。互いに 5m～10m 程の間隔を置いて南北に並んでいるが、主軸の方向はそれぞれ異なっている。これらの建物跡は、いずれも一部あるいは半分以上が調査区外に延びているため、全体の規模・構造・内部施設などについては不明な点が多い。第 5 表では長内遺跡で発見された構造の各属性を示した。堅穴建物跡の平面形態は、いずれも長方形または方形を基調としている。規模は長辺 5 m 以上のもの (SI01～06) と 4m 程のもの (SI04) に分けることができる。SI07 については主柱穴や炉跡などの位置関係から前者に含まれると推定される。

床面は貼床が確認されるもの（SI04・07）と掘方埋土を床面とするもの（SI01・06）が認められた。貼床が認められた例は、いずれも建物中央部のみに分布しており、それ以外の部分では掘方埋土を床面としている。主柱穴はSI06・07の2棟で検出された。これらの建物跡では、主柱穴に重複關係が認められることから、一度建て替えが行われていると考えられる。周辺はSI01のみで確認された。南東壁際の一部を以て全周するものと見られ、部分的に4・5層中から上方に細長く延びる黒褐色土（図版3-3）を確認しており、これらは壁材痕跡の可能性も考えられよう。炉跡はSI06を除く3棟で確認された。いずれの例も建物中央のやや北側で1ヶ所検出されている。

土坑はSI01・07で検出されており、いずれの建物跡でも新旧の重複が認められる。いずれもK2が自然堆積で埋まり切った後にK1を掘り込んでいたとみられる。このことから、機能時には土坑内部の清掃などは行われなかったとみられ、貯蔵穴としての機能の他、水に関する機能（松井2015）も想定されよう。SI01KI底面から出土した土器は、本来土坑周辺の床面に存在したものが、埋没過程で流れ込んだものと考えられる。また新しい土坑(K1)は堆積土に炭化物・焼土を多く含むことから、火災時では開口していたと見られる。SI01では土坑周辺に粘土塊の分布が見られた。この粘土塊は、黄褐色を呈する粘性の強いもので、付近の地山には見られないことから、何らかの目的で別の場所から持ち込まれた可能性が考えられる。

屋根構造については、SI04床面上からまとまって出土している炭化材・焼土ブロックなどから、土屋根の存在が考えられよう。他の建物跡についてもSI04程顕著ではないが、炭化材・焼土ブロックが認められ、同様の構造を想定しておきたい。

また、SI07では南壁際の一角で梯子状炭化材が検出された（図版7-3）。類例として大崎市留沼遺跡第1号住居跡出土の梯子状炭化木製品が挙げられる（宮城県教育委員会1980）。第5章でも述べた通

表 5 导内消谐属性表

り、この炭化材の下位で確認されたP4は掘り込みが浅く、柱底跡も見つかっていないが、壁面や梯子状炭化材との位置関係から、いわゆる「壁際ピット」（宮城県教育委員会 1992、1993）と考えられ、梯子の据え穴としての機能が推定される。P4は堆積土に焼土や炭化物を含み、火災時に開口していくと考えられることから、梯子は根元が埋め込まれたものではなく、くぼみに固定されたような状態が想定される。梯子状炭化材と「壁際ピット」を建物の入り口施設とすると、SI07 積穴建物跡は入り口から見て左側の壁際に土坑、中央やや奥側に炉跡が設置されていたことがわかる。このような床面施設の配置は、宮城県内の同時期の遺跡（宮城県教育委員会 1992、1993）に一般的なものである。

### 3) 焼失建物跡について

ここでは、主に遺物の出土状況から火災の要因について検討する。床面上で発見された土器は、偶然残されたもの、建物跡の廃絶に伴い選択的に残されたもの、あるいは廃絶の儀礼に伴い残されたものなどの可能性が考えられる。SI01・04・07については、10～20個体程の多数の遺物が残されており、構成が特定の器種に強く偏る状況は見られない。こうした出土状況を示す土器については、意図的に残されたと考えることは難しいと指摘されている（桐生 1993a・b）。これらのことと踏まえると、不慮の火災に遭ったために、結果的に多くの土器が放置されることとなつたとするのが妥当と考えられる。建物内に残された土器は床面付近にまとまっており、ある程度埋没が進んだ後に建物跡地に遺物の投棄など行われた形跡はない。また、火災後に埋め戻しや建物跡の再建などが行われた形跡もない。これらのことから、火災後は付近での人間活動は頗著でなかったと推定され、周辺の状況は明らかでないが、火災によって少なくとも集落の一部が廃絶・移転した可能性が考えられる。

## 第2節 その他の遺構と遺物

SI03 積穴建物跡、SX05 積穴状遺構からは土師器、須恵器などが出土している。ここでは、これらの土器の特徴をまとめ、年代的位置づけについて検討する。また SX02・08 性格不明遺構についても若干の検討を行う。

### (1) SI03 積穴建物跡

床面近くの堆積土からいずれも破片であるが、ロクロ調整の土師器壺、甕、筒形土器が出土している。第25図1は筒形土器の口縁部である。外面に輪積み痕を残し、内面にはナデ調整が見られる。また、胎土には本遺跡の他の土器には見られない白色針状物を含むことから、在地で製作されたものではないと考えられる。類似した筒形土器は8世紀から10世紀の福島県相馬地域から双葉地域を中心に分布しており（高橋 2013）、福島県南相馬市船沢A遺跡 SI05 積穴建物跡（福島県教育委員会 1991）、大田和広畑遺跡 SI04 積穴建物跡（福島県教育委員会 2009）、楢葉町鍛冶屋遺跡 SI01・03・12・15～17・24・28 積穴建物跡（福島県教育委員会 2000）などが挙げられる。SI03 積穴建物跡出土土器は、ロクロ調整の土師器壺、甕が出土していることから、9～10世紀頃の年代が推定され、遺構についてもほぼ同時期のものと考えられる。

### (2) SX05 積穴状遺構

堆積土から土師器壺の破片、須恵器壺、遺構確認時にロクロ調整の土師器壺の破片が出土している。須恵器壺（第27図1）は、平底で口縁部・体部は直線的に外傾する。静止系切りによる切り離し後、体部下端から底面に回転ヘラケズリによる再調整が施される。類例として色麻町日の出山窯跡群A地点6・8号窯跡（宮城県教育委員会 1970）、C地点第III群土器（色麻町教育委員会 1993）などがあり、8世紀前半～中頃に位置付けられている。したがって第28図1の壺も同様の年代に位置付けられると考えられる。土師器壺（第27図2）は、口縁部から体部と体下部から底部の破片である。直接の接合関係はないが、特徴が類似することから同一個体とした。底部から口縁部まで直線的に外傾し、体上部でやや内側に屈曲している。器形の特徴から須恵器壺を模倣したものと考えられる。土師器の類例として福島県相馬市北原遺跡4b号住居跡（福島県教育委員会 1986）、須恵器の類例として色麻町日の出山窯跡群C地点第4号窯跡、第3号・第8号積穴住居跡（色麻町教育委員会 1993）、多賀城市市川橋遺跡 SX1351C 河川跡（多賀城市教育委員会 2003）、角田市品濃遺跡 SK01 土坑（角田市教育委員会 2007）などがあり、これらは8世紀前半から9世紀前半に位置付けられることから、第28図2についても同様の年代が推定される。これらの出土遺物は、いずれも堆積土からの出土であるが、遺構の年代としてもほぼ同時期のものと捉えておきたい。

### (3) SX02・SX08 性格不明遺構

SX02は壁が緩やかに立ち上がることから、自然の堆み、もしくは皿状に掘り込まれた土坑であつたと考えられる。部分的な検出のためいずれとも判断できないが、0.4mほどの深さがあったことを重視すると土坑であった可能性が考えられる。また、堆積土中に人為的に投棄された層があることから、積穴建物跡と同時期に存在していたと思われる。なお、堆積土最上部に洪水堆積層が存在することとは古墳時代前期の積穴建物跡と共通するものの、出土資料に乏しく年代的位置付けの詳細は不明である。

SX08は、小甕や土師器片が一定範囲にまとまって出土したことから、落ち込みは捉えられなかつたものの SX02 と同様のものであった可能性を考えておきたい。

### 第3節　まとめ

- 長内遺跡は阿武隈川北岸に形成された標高約20mの自然堤防上に立地する遺跡である。堅穴建物跡5棟、堅穴状造構1基、性格不明造構2基などが検出された。
- 古墳時代の遺構は堅穴建物跡4棟であり、いずれも焼失建物跡である。土師器・金属製品・炭化材などが出土し、年代はいずれも古墳時代前期と見られる。これらの内2棟の堅穴建物跡は建て替えられている可能性があり、一定期間居住したのち火災により廃絶したものと推定される。丸森町では古墳時代前期の堅穴建物跡は初めての発見である。また、多数の土器が一括性の高い状態で出土しており、これらは該期の土器の編年あるいは土器の使用法、堅穴建物跡内の空間利用などを検討できる良好な一括資料といえる。
- 古代の遺構は堅穴建物跡1棟と堅穴状造構1基である。堅穴建物跡はロクロ調整の土師器、筒形土器などが出土し、年代は9～10世紀頃とみられる。堅穴状造構は土師器・須恵器などが出土し、年代は8世紀前半～9世紀前半頃とみられる。

#### 引用・参考文献

- 青山博樹 1997 「東北南部における古墳編年と土器編年の対応についての予察」『福島考古』第38号 pp.37-54
- 青山博樹 1999 「小牛田町山前遺跡出土の埴釜式土器とラウンドスレーバー——北辺の古墳時代社会と続縄文社会—」『宮城考古学』第1号 pp.67-80
- 青山博樹 2010 「古墳時代前期の土器編年—仙台平野とその周辺—」『北杜』辻秀人先生還暉記念論集 pp.17-36
- 五十嵐祐介 2009 「堅穴建物跡や廃屋化土器の出土状況から廃屋を探る—」『秋田考古学』第53号 pp.49-66
- 石巻市教育委員会 1995 「田道山遺跡」石巻市文化財調査報告書第7集
- 氏家和典 1957 「東北土器の型式学分類とその編年」『歴史』第14輯 pp.1-14
- 角田市教育委員会 1992 「西屋敷1号墳・言内1号墳発掘調査報告書」角田市文化財調査報告書第8集
- 角田市教育委員会 2007 「市内遺跡発掘調査一角田郡山遺跡・品濃遺跡調査概報」角田市文化財調査報告書第32集
- 菊地芳郎 2001 「東北地方の古墳時代集落—その構造と特質—」『考古学研究』第47巻第4号 pp.55-75
- 柳生直彦 1987 「転用土器雑考—壺形土器をめぐって—」『東京の遺跡』No.15 p.3
- 柳生直彦 1988 「転用土器雑考 Part2」『東国史論』第3号 pp.27-34
- 柳生直彦 1993a 「残された」遺物と「残った」遺物—自然廃屋・焼却廃屋と不廃廃屋の対比—」『東京の遺跡』No.40 p.8
- 柳生直彦 1993b 「床面上出土遺物の検討(II) —東京都における弥生時代～古墳時代中期住居址の事例分析を通じて—」『物質文化』56 pp.23-51
- 国見町教育委員会 1974 「国見町の文化財」国見町文化財調査報告書第3集
- 蔵王町教育委員会 2008 「六角遺跡」蔵王町文化財調査報告書第6集
- 色麻町教育委員会 1993 「日の出山墓跡群—詳細分布調査とC地点西部の発掘調査—」色麻町文化財調査報告書第1集

志間泰治 1964 「宮城県伊具郡矢ノ目遺跡」『日本考古学年報』12号 p.103

仙台市教育委員会 1990 『下ノ内遺跡—仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書II』仙台市文化財調査報告書第136集

仙台市教育委員会 2009 『大野田古墳群』仙台市文化財調査報告書第339集

仙台市教育委員会 2010 『沼向遺跡第4～34次調査』仙台市文化財調査報告書第360集

多賀城市教育委員会 2003 『市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II』多賀城市文化財調査報告書第70集

高橋 透 2013 「東北地方における古代の塩の生産と流通—陸奥湾から太平洋沿岸地域を中心に—」『第16回古代官衙・集落研究会報告書 塩の生産・流通と官衙・集落』奈良文化財研究所研究報告第12号 pp.81-111

次山 淳 1992 「埴釜式土器の変遷とその位置づけ」『完班 墓藏文化財研究会15周年記念論文集』 pp.235-248

辻 秀人 1993 「東北南部の古墳出現期の様相」『日本考古学協会1993年度新潟大会 東日本における古墳出現過程の再検討』 pp.283-297

辻 秀人 1994 「東北南部における古墳出現期の土器編年—その1 会津盆地—」『東北学院大学論集—歴史学・地理学—』第26号 pp.105-140

辻 秀人 1995 「東北南部における古墳出現期の土器編年—その2—」『東北学院大学論集—歴史学・地理学—』第27号 pp.39-88

寺沢 薫 1986 「畿内古式土器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第49冊  
名取市教育委員会 2002 『宮城県名取市 野田山遺跡』名取市文化財調査報告書第47集

追町教育委員会 1995 『佐沼城跡』追町文化財調査報告書第2集

福島県教育委員会 1986 「国道113号バイパス遺跡調査報告II」福島県文化財調査報告書第166集

福島県教育委員会 1988 「国道113号バイパス遺跡調査報告IV」福島県文化財調査報告書第192集

福島県教育委員会 1989 「国道113号バイパス遺跡調査報告V」福島県文化財調査報告書第211集

福島県教育委員会 1991 「原町火力発電所関連遺跡調査報告II」福島県文化財調査報告書第265集

福島県教育委員会 2000 「常磐自動車道遺跡調査報告21」福島県文化財調査報告書第365集

福島県教育委員会 2009 「常磐自動車道遺跡調査報告55」福島県文化財調査報告書第458集

古川一明(ほか) 1993 「東北南部の集落の概要」『日本考古学協会1993年度新潟大会 東日本における古墳出現過程の再検討』 pp.298-299

松井孝宗 2015 「墨内土坑の再検討—弥生・古墳時代の堅穴住居内の貯蔵室をめぐって—」『駒澤考古』第40号 pp.71-87

宮城県教育委員会 1970 『日の出山墓跡群』宮城県文化財調査報告書第22集

宮城県教育委員会 1980 「東北新幹線関係遺跡調査報告書III」宮城県文化財調査報告書第65集

宮城県教育委員会 1983 『朽木橋横穴古墳群 宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第96集

宮城県教育委員会 1985 「今熊野遺跡 一本杉遺跡 馬越石塚」宮城県文化財調査報告書第104集

宮城県教育委員会 1992 「野田山遺跡」宮城県文化財調査報告書第145集

宮城県教育委員会 1993 「北原遺跡」宮城県文化財調査報告書第159集

宮城県教育委員会 2016 『入の沢遺跡—一般国道4号栄館バイパス関連遺跡調査報告書IV』宮城県文化財調査報告

書第245集

山元町教育委員会 2015『中筋遺跡』山元町文化財調査報告書第10集

丸森町史編さん委員会 1984『丸森町史』

丸森町教育委員会 1979『高畠遺跡』丸森町文化財調査報告書第1集

丸森町教育委員会 1999『大古町遺跡—第1次・2次調査概要—建設省桙づみ事業に伴う発掘調査』丸森町文化財調査報告書第16集

丸森町教育委員会 2003『大古町遺跡—国道113号舗矢間バイパス工事に伴う発掘調査報告書I—』丸森町文化財調査報告書第17集

丸森町教育委員会 2004『大古町遺跡—国道113号舗矢間バイパス工事に伴う発掘調査報告書II—』丸森町文化財調査報告書第18集

丸森町教育委員会 2008『高畠遺跡一町道深山線取付道路改良工事に伴う発掘調査報告書—』丸森町文化財調査報告書第21集

丸森町教育委員会 2017『台町遺跡・台町古墳群—阿武隈川下流右岸金山地区河川改修事業に伴う平成28年度発掘調査報告書—』丸森町文化財調査報告書第23集

## 写真図版



1. I 区全景（南から）



2. I 区全景（北から）



3. II 区 SI01 遺物出土状況（北から）



4. II 区 SI01 遺物出土状況（南から）

図版 1 I 区全景、SI01 竪穴建物跡 (1)



1. II 区 SI01 完掘状況（南東から）



2. II 区 SI01 遺物出土状況西側（南から）



3. II 区 SI01 遺物出土状況東側（南から）

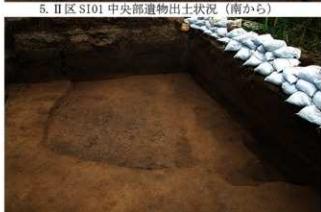


4. II 区 SI01K1 遺物出土状況（南西から）



5. II 区 SI01K2 断面（西から）

図版 2 SI01 竪穴建物跡 (2)



図版3 SI01 竪穴建物跡(3), SX02 性格不明遺構



図版4 SI03 竪穴建物跡



1. III区 SI04 炭化材出土状況（北から）



2. III区 SI04 遺物出土状況（南から）



3. III区 SI04 完掘状況（南から）



4. III区 SI04 東壁（西から）



5. III区 SI04 北東隅遺物出土状況（南から）



6. III区 SI04 北東隅有孔鉢・片口付甕出土状況（西から）



1. III区 SX05 完掘状況（東から）



2. III区 SX05 西壁（東から）



3. III区 SI06 東壁（西から）



4. III区 SI06 完掘状況（西から）



5. III区 SI06 東壁土器壺出土状況（南西から）



6. III区 SI06P2・P3 断面（西から）

図版 5 SI04 竪穴建物跡

図版 6 SX05 竪穴状遺構、SI06 竪穴建物跡



1. III区 SI07 炭化材出土状況（南から）



2. III区 SI07 床面検出状況（南から）



3. III区 SI07 梯子状炭化材出土状況（南から）



4. III区 SI07K1・K2・P4（南から）



1. III区 SI07 北西隅遺物出土状況（南から）



2. III区 SI07 炉跡周辺遺物出土状況（南から）



3. III区 SI07 遺物出土状況（北から）



4. III区 SI07 炉跡検出状況（南から）



5. III区 SI07P2 断面（東から）



6. III区 SI07K1・K2 断面（東から）

1. SI01



7. 瓢矢間小学校現場見学 (SI04付近)  
8. 瓢矢間小学校現場見学 (SI01付近)

図版 9 SX08 性格不明遺構、作業前風景、試掘トレンチ、見学会

図版 10 遺構出土土器

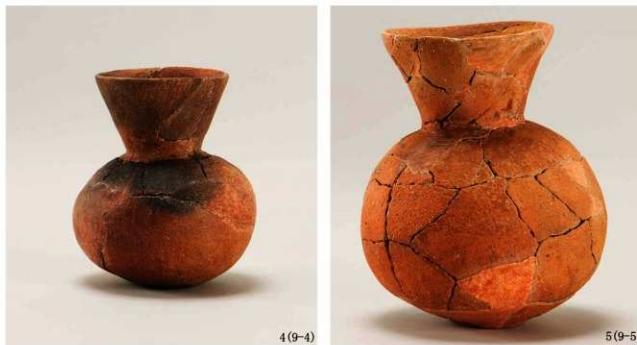


2. SI04



3. SI07





图版 11 S101 竖穴建物跡 出土土器 (1)



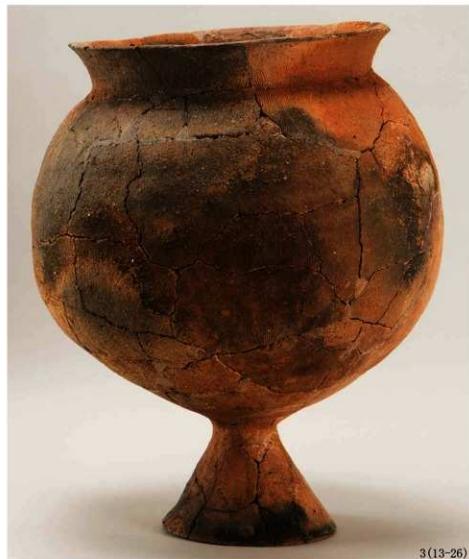
图版 12 S101 竖穴建物跡 出土土器 (2)



图版 13 S101 竖穴建物跡 出土土器 (3)



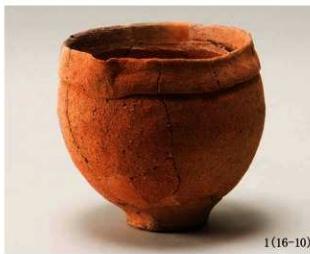
图版 14 S101 竖穴建物跡 出土土器 (4)



图版 15 S101 竖穴建物跡 出土土器 (5)



图版 16 S104 竖穴建物跡 出土土器 (1)



1-3: SI04, 4-6: SI07

图版 17 SI04 坚穴建物跡 出土土器 (2), SI07 坚穴建物跡 出土土器 (1)



图版 18 SI07 坚穴建物跡 出土土器 (2)

S=1/3

報告書抄録



1・2:SI07, 3:SI06, 4・6a・6b:SX05, 5a・5b:SI03

図版 19 SI07 穹穴建物跡 出土土器 (3), SI03・SI06 穹穴建物跡・SX05 穹穴状遺構 出土土器

報告書抄録						
ふりがな	ながうちいせき					
書名	長内遺跡					
副書名	町道改良事業に伴う平成29年度発掘調査報告書					
卷次						
シリーズ名	丸森町文化財調査報告書					
シリーズ番号	第24集					
編著者名	荒井権作・佐藤則之・梅川隆寛					
編集機関	丸森町教育委員会					
所在地	〒981-2192 宮城県伊具郡丸森町字鳥屋120 TEL 0224-72-3036					
発行年月日	西暦2019年7月5日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系	調査期間	調査面積
長内遺跡	宮城県伊具郡丸森町 たかだまちいそくぐんまるもりまち 猪矢町鶯山字長内	市町村	遺跡番号	北緯 東経	2018.8.3 ~10.20	247m <sup>2</sup>
		04341	10085	37度 55分 19秒	140度 46分 08秒	町道改良
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
長内遺跡	集落	古墳時代・ 古代	竪穴建物跡・竪穴 状遺構・性格不明 遺構	土師器・須恵器・ 中世陶器・金属製品	古墳時代前期の竪穴建物 跡4軒・古代の竪穴建物 跡1軒を検出	
					長内遺跡は、阿武隈川北岸に形成された自然堤防上に立地している。丸森町による町道改良事業 に伴い、平成29年度に発掘調査を実施した。調査の結果、古墳時代前期の竪穴建物跡4軒、古代の 竪穴建物跡1軒、竪穴状遺構基および性格不明遺構2基などを検出した。古墳時代前期の竪穴建物 跡はいずれも火災に遭っているとみられ、丸森町では初めての発見となった。この他、古代の遺構 は8~10世紀頃のものとみられ、断崖はあるものの、この地が人々に繰り返し利用されてきたこと が明らかとなった。	
要約						